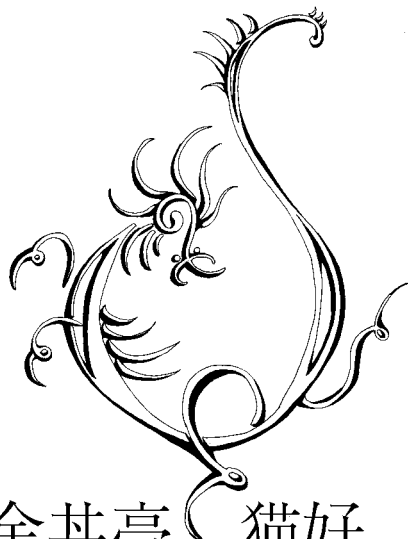




むかしのはなし

— 雷遊子の旅立ち —

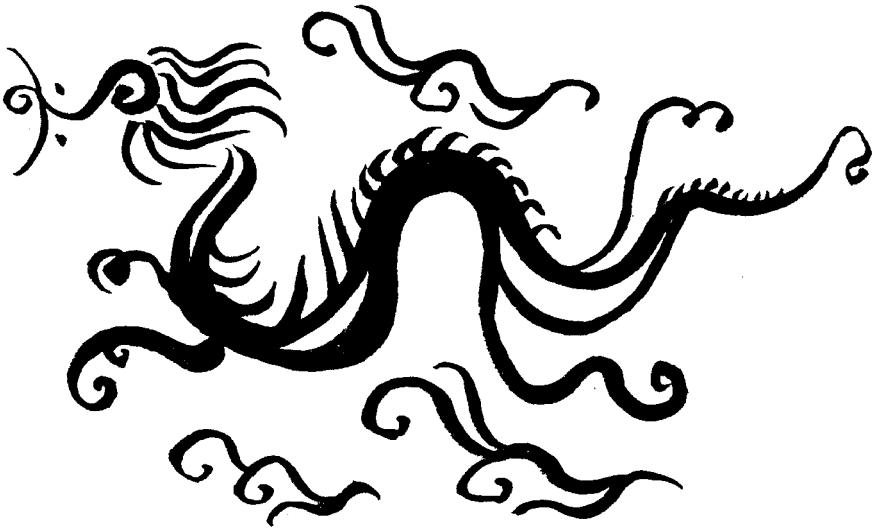


金井亭 猫好

目次

第一回	山裾の閑村にて	三
第二回	緑宝寺の盤印	二三
第三回	南岳の魔人	四七
第四回	草原の術師	七一
第五回	盾の勇者	九六
	あとがき	一一七

イラストレーション……水瀬^{みなせ}霖^{りお}生



第一回 山裾の閑村にて

—

むかしのはなしである。

今で言うなら中国の西のほう、山に間近いとある閑村かんそんの古びた家に、数年前から二人の人間が住んでいた。

ひとりとは三十前後の男で、名は妙漣みょうれん。こざつぱりとした風体ふうたいではあるが、どことなく浮世離れうきよなはなしている。もうひとりはまだ十にもならぬ子供で、名は雷遊子らいゆうし。この子の名前を聞いたとき、村人はそろって納得した。すなわち、かれらは仙人なのだと。

村人もはじめは胡散臭うさんくさげではあったが、この二人は村の仕事も熱心に手伝い、怪我けがや病気を治療なほし、また火事がおきたときなど、妙な術を用いてこれを消し止めたりもしたので、今ではかれらの家を訪ねる者さえあった——たまに、ではあるが。

仕事のないときには、二人は村はずれにある、高い高い崖を前にわけのわからない事などしていたが、仙人のやることなどわかるはずもないと、あえて口出しをする者もいなかった。

しかし、いついかなるときでも、子供の探求心にかなうものはない。二人のことに興味を覚え、いち早く打ち解けたのも、やはり子供たちであった。

二

今日も崖のそばでは、師弟がそろって弓を引いていた。矢もつがえずに。

「雷遊子、遊ぼうよ」

やや舌つ足らずな声と言う。大人の方が弓を引いたまま振り向くと、遊び道具を手につばい抱えた子供が、三人ばかり立っていた。

「おう、もう少ししたら終わるからな、そしたら遊んでやってくれ」

妙漣の声が響く。のんびりとした——とても、弓を思いきり引いている人の声などではない。となりで弓を引く子供が、ずいぶんと小さい弓を前に四苦八苦しているのとは対照的である。

小さな訪問者たちが去って少しした頃、妙漣が声をかけた。

「今日はそのへんでいいだろう。弓を戻せ、そおつとな」

雷遊子は、言われた通りにゆっくりと弓を元に戻し、安堵のため息をついた。呼吸を整えてから妙漣に向き直って尋ねる。

「老師、これは一体何のためなの？」

妙漣は一瞬目を丸くし、次いで眉をひそめ、しばし目をつむって考え込んだ。と、おもむろに目と口を開ける。

「たしかに、話しておいた方がいいのかもしれないな。…はつきり言って、この修行にたいした意味は

ない。小手先の術を使う者には、な」

少年は当惑げに師を見つめている。妙漣は、やれやれといった具合に軽く微笑んで続ける。

「要するにだ、お前は次の段階に入ったんだよ。もっと上の術師を目指す段階へ……」

言いつつ、目を遠くに向ける。

「上の術師……」

「実際にやったほうが早いだろう。雷、地剝法をやってみなさい」

地剝法と言うのは、彼等の使う術の一つである。術師の言つところの『光』を地に落とし、地表の一部を剥がし取るというもので、術としてはごく初歩的。もちろん、雷遊子も心得ていた。

手を組み、指を整え、目をつぶって己の中の『光』をある形に沿って動かす。何度も何度も動かすうちに、周りの『光』が自分に向かって集まってくる。自分の『光』によって変質した周りの『光』が地に落

5 第一回 山裾の閑村にて

ち、その表面を引き剥がす！

雷遊子の目の前で、砂が踊りはじめた。パラパラという軽く固い音がだんだん大きくなり、ついにゴロゴロといった重い音に取って変わられる。小石からやや大きな石までが飛び跳ねはじめたのだ。

大きめの石が自分の体を飛び越すまでになつてから、雷遊子は術を止め、『どうだ』と言わんばかりの顔で師匠を見上げた。

妙漣は軽くうなずきながら、

「うん。まあ、それがお前の今の実力だ。初心者なら褒めてやってもいい。しかしだ、より上の術師を目指すなら、それで満足してはいかん。…見ていなさい」

師は、すぐさま型を作った。先ほどの型と比べて特に変わったところはない。強いて言うなら、こちらの方が少しばかり柔らかいだろうか。しかし、その微妙な差のもたらしたものは、劇的と言えた。

一瞬、雷遊子はその目を疑った。当然だろう。自

分と同じ型で、同じ術を使っているはずなのに…目の前では、自分の倍はあろうかと言う岩が、轟音と共に砕け散って行くではないか！！

茫然と見つめる弟子に、手をほどいた妙漣が話しかけた。

「地剥法は、決して初心者向けの術というわけじゃないぞ。使う者が使いさえすれば、立派な武器にもなる。…これから教え込むのは、そこなんだよ」

遠くから子供たちの声がしてきた。多分、先ほどの音に驚いたのだろう。妙漣は、雷遊子の子供たちへの説明役に回すと、今度は一人、崖に向けて弓を引いた。…矢をつがえずに。

三

術師。それは、仙道と同等、場合によつてはそれを上回るほどの力を持ちながら、歴史の表舞台はあろか、伝承にすら姿を見せない存在である。妙漣の

所属しているのは、緑宝寺空諾率りよくほていこうたくだくいる衝派源流しょうはいげんりゅう。数ある流派の中でも、特に表に出ることを嫌い、ただひたすらに『空魔』を倒すべく修行を続ける者達である——とでも言えば聞こえがいいが、実際はそんなに格好のよいものではない。

空魔の気に敏感すぎる者達が、唯一安心して暮らせる場所——緑宝寺——を求めて寄り集まっただけのある種の不具者の集団。それが、衝派なのである。

しかも、この空魔というものが一体なんなのか、真に知る者は一人もいない。そもそも空魔について分かっていること自体、本当に数少ないのである。その中でもっとも重要、かつ切実な問題は、「空魔の『気』が強くなると、かれらに耐え難い頭痛がたが生じる」ということ。このために、正体が分からなくても、無視するわけにはいかないのである。

かれらは身につけた術をもつて空魔の気から身を守りはしている。しかし、それも空魔が別の世にい

るからこそ耐えられるのであって、この世にやってきたならば、そう長く持ちこたえることは出来ないだろう。かれらが生き延びるためには、この世に出ようとする空魔を倒すか、倒せないまでも封印しなければならぬ。

前回空魔がこの世に表れたとき、戦いに加わった術師たちは全滅。しかも、充分な封印をかけることさえ出来なかった。かくして源流は、人材も、時間も無いと言っ、まさに存亡ぞんぼうの危機に直面することになってしまった。

生まれつき恐ろしいほどの『明』(『才能』)と言い替えてもいい)を持つ雷遊子。この子は人材難の源流にとつて、かけがえのない希望の光であった。そこで、まったくもつて異例のだが、緑宝寺はこの子を緑宝寺の外で育てることにした。そのため師として選ばれたのが、とある事情で前の戦いに参加していなかった倒魔術師——鴻妙連うみくづれんなのである。

7 第一回 山裾の閑村にて

四

翌日の夜、修行を終えて家に戻ってきた師弟の許に、珍しくも来客があった。

一人は十五、六になる小柄な娘。…もっとも、これは毎日のことなので特にどうと言つこともない。「珍しい」というのはもう一人、娘と入れ違いにやつて来た男の方である。

この男、名を泉碓せんたいという。妙漣とは古い馴染みで、源流術師たちの間ではお互い『変わり者』で通つてゐる。遠慮する仲でもないのに、妙漣は夕食の残りをすすめ、客の方もそれをきれいに平らげた。その間に、妙漣は雷遊子を寝かしつけ、食器を洗い、席に戻る。

「慣れたもんだな」皿を重ねながら、客が話しかけた。「いやでも慣れるさ」妙漣は客の皿を洗い場に持つて行き、帰りがけに壺と、椀を二つばかり持つてきた。

酒が入ると、舌が滑らかになる。口火を切つたの

は、泉碓の方だった。

「しかし、お前もすみに置けんなあ。さっきの娘、なかなかかわいいじゃないか」

「よせよ、くだらん勘ぐりは」妙漣は苦り顔である。

「ありゃあ、ここの村長の娘だよ。…以前に近くの崖が崩れてな、そんなとき村長が巻き込まれて大怪我けがしたんだ。それを俺が、医呪いじゆでチヨイチヨイつとやつてね。で、娘が礼がしたいつて言つから、夕飯を頼んだんだよ。俺はその日だけのつもりだったんだが、…どうも、雷遊子を気に入つたらしくて、毎日おかずを差し入れてくれるんだ」

言えは言つほど弁解口調になる。泉碓は、にやにやしながら聞いている。

「ま、医呪を習つといて助かったよ。…そついやおまえ、縁宝寺にも寄つてきたんだろ。どうだい、医呪の長の様子は？」

無理に話題を変えようとしているのが見え見えではあったが、泉碓もこれ以上突つ込むつもりはない

ようで、破顔しながら答えはじめ。

「ああ、あの薬草キチガイか、元氣だよ。周りも元氣なのが揃ってるんで、薬を使えないとかボヤいてたな」

妙漣も笑った。

「今はまだ平和なんだし、行商でもすればいいのにな」
 「俺もそう言ったよ。そしたらあのおっさん、なんて言ったと思う？『そんな事したら、貴重な薬草が減るじゃないか』とこつだぜ」

あばら家に笑い声がこだました。

ひとしきり笑ったあと、二人の顔が急に真剣になる。

「で、仙道の方はどうだったんだ？」

妙漣の声は、いつもよりはるかに厳しい。

緑宝寺の術師達は、もともと仙道とは仲が悪い。術師が世に出るとき、その正体を知られぬように仙人の姿を借ることがあるが、これがかれらのカンにさわっているためである。

雷遊子を育てるため緑宝寺を離れている彼にとつて、これは重大な問題だった。仙道との調停役として泉碓が駆り出されたことは彼も聞いていたので、その顔を見たときから、要件は多分仙道がらみだろうと踏んでいた。

「うむ」泉碓の声は重い。手許の椀を一息で空けて、
 「結論から言うと、仙道の名を汚さない限り、俺達の行動は『黙認』だぞうだ。…ただし、これは非公式のものでな、公式には『無視』——術師なんぞ、この世にいないはず——だ」と

妙漣の顔がゆるんだ。深いため息は安堵からのものであろう。

「公式じゃなくてもかまやしないさ。とにかく、仙道とのゴタゴタだけは避けたかったからな」

客は椀の中の酒を眺めながら、

「仙道がそんなに恐いかねえ…お前なら、そうたいした相手でもあるまいに」

ダンッ！と強い音が響き渡る。机に叩きつけられ

9 第一回 山裾の閑村にて

た腕は、なんとかその形を保っていた。

「仙道をなめちやいかん!!」

怒鳴ってから、はつと我にかえって寢床を見る

……が、布団は静かに上下するだけ。ふうと息をついて、抑えた声で続ける。

「たしかに俺も、相当の道士と渡り合える自信はあるさ、一対一ならな……しかしな泉碓、いかんせん数が違いすぎるんだ。いま術師は百人もいないだろうが、むこうは少なくとも五千はいる! ……とても勝てる相手じゃないぞ」

乱暴に酒を酌み、一息で流し込む。

「第一、俺達の敵は空魔だろうが、他の連中と、しなくてもいいゴタゴタ起こして人死に出すなんぞ、まったくバカげてる!!」

泉碓は黙って二杯ばかり飲んだ。しばらくしてからぼつりと言つ。

「緑宝寺の連中も、そのくらい物わかりがよけりゃいいんだがな……」

弱々しい声の調子に、妙漣は不安になった。

「仙道と、なにかあつたのか?」

「ああ、あつちも自信過剰なのが多くてな……『黙認』に持つていくのだから、向こうが困つてなきや無理だつたらう。それなのに、緑宝寺のバカどももきたら……」

妙漣にも、だんだん情況がわかつてきた。

「要するに、条件付きで『黙認』か」

泉碓は、目をつむつてうなずいた。

「いま、都の方が荒れててな。ドサクサまぎれに、エセ仙人がかなり悪い事してるんだ。仙道としても見過ごすわけに行かなくなつたらしいんだが……チト面倒なのが数人いてなあ、人出が足りんだぞうだ」

泉碓は仙道に世話になつていた事があり、友人も多い。『面倒』とは何のことなのか、妙漣には薄々想像がついたが、気を使って口には出さなかつた。

「それで、『手伝う代りにこつちを認める』つて詰め寄つてな、向こうは仕方なく認めた……事にしてあ

る。そうでもないよ、向こうの面子が立たないんでな。ま、実のところ、しまいにや泣き付きかけてただけど……ところが緑宝寺の連中、『そこまでして認めてもらおうなど、恥だ』つつつて、手伝いに出す奴の人選もしやがらん！ まったくあのバカどもは、てめえの術がこの世で一番強いとも思ってるのかね
!!

妙漣には、交渉の様子が目に見えるようだった。手伝うと言っておいて誰が行くかも伝えなければ、それこそ相手の面子が潰れる。かと言って手伝いが出来るような強い術師は、ほとんどが面子にこだわる連中である。ましてや泉碓が説得したのでは、ことを仙道に有利に計らったと勘ぐられても仕方なかったろう。妙漣も彼らの気持ち分らない訳ではないが、どちらかと言つと『名より実を取る』性格であった。

実は、泉碓が緑宝寺で説得を試みていたとき、長

の空諾が妙漣のこの性格を見込んで、助けを求めるよう勧めたのである。妙漣は雷遊子を育てることに關して緑宝寺の全権を得ているから、その権限を用いて独断でやったとなれば、反対派の面子も立つことになるよと読んだのだ。

もつとも、妙漣もそこまでは気がつかなかつたようである。

「わかつたよ、俺が出るつてことで納得させたんだ。で、いつ発つんだ？」

「明日の朝。でないと間に合わない」

妙漣は頭が痛くなつた。

「やれやれ、お前じゃ負けるよ。俺がいやだつて言つたらどうするつもりだつたんだ？」

「別に。ただ、あとで争いが起きるだけさ」平然と答える。

妙漣は頭を振りながら酒壺を引き寄せ、中身を見ると相手に押し戻した。椅子の背にかけておいた弓を取り、磨きはじめる。

11 第一回 山裾の閑村にて

「珍しいな、武器嫌いのくせに弓かい…」

そう尋ねる泉碓の顔は、明らかに不満そうだった。その視線をあつさり流して弓磨きを続ける。

「雷遊子に、貫山弓を教えようかと思つてな。まあ、俺もそうまいわけじゃないけど、『閃』を鍛えるには打つてつげだから」

「雷遊子はどうだい、ものになりそうか？」

妙漣の手が止まった。満面に笑みを浮かべて、

「うん、時間さえあればとんでもない術師になるぞ、あれは。…特に結果が凄い。『殻』の結果は一度見せたいくらいだ。変な癖がないから、きれいな結果だぞ。これで攻めの方がしつかりすれば…」

今度は泉碓の方が頭痛を感じた。こいつはいつの間にかこんな親バカになったんだらうか…友の表情に構わず喋り続ける妙漣を手で制して、

「それならまあ、一人にしておいても大丈夫かな。何と言つても遠いから、子連れだと時間がかかるしな」

「ああ、そういう事か…念のため、村長に預けては

おくが…都ほどじゃないかも知れんが、ここも少し荒れててな。妙な理由をつけては税を取つてくんた。仕方ないから、となりの国へ移つちまおうかと思つてるんだがああ崖でな、身動きが取れん」

「なるほど、それで貫山弓か」

「ああ、むかし習つたのを思い出しているのさ。もう少ししたら間違ひなく出来るようになるから、それまでは何があつても我慢しなきゃならんのだが…雷遊子に納得させるのがホネでなあ…」

泉碓は寝ている雷遊子をチラリと見て、

「ん。まあ、出来るだけ早く帰れるようにはしてみよ。風乗りのうまい奴も行くことになつてるしな」
言いながら酒壺を裏返しにして、最後の一滴を嘗めつくすと、

「とにかく敵さんを早めにやつつける、これが一番さ。期待してるぜ、もと総師範！」

妙漣の腕が手の中で砕けた。鋭い目で相手を睨みつける。

泉碓は目線それを無視して、

「さて寝るか。あしたは早いぞあ」

伸びをしながら、寢床へと向かった。寝る場所を聞きませずに――

泉碓の布団から、寢息が聞こえてきた。

妙漣は床下から極上の酒を取り出して、しばらくの間、考え事をしながらちびちびと飲んでいた。

五

翌日の朝、妙漣は雷遊子を村長に預けて、泉碓と共に村を出ていった。

雷遊子は畑に出て仕事をしたり、村長の家で、娘の麗鈴れいりんの手伝いをしながら二日を過ごした。

三日目の昼ごろ、村の真中に人が落ちてきた。『風』に乗って都からやってきた術師である。見ていた村人も、不思議そうな顔こそしたものの、妙漣で免疫

が出来たのか、特に恐がりもせず、村長の許へとつれて行つた。

彼は村長や雷遊子の前でも名乗りもせず、ただ妙漣からの伝言だけを残して、すぐに消えていった。…文字通りに。

伝言はごく単純なものだった。なにせ『長引きそうだ。もう数日かかる』と、これだけなのだから。

雷遊子は少し不安になったものの、子供の本能の方がそれに勝つた。仕事も遊びも手伝いも、何でも楽しい年頃なのだ。

六

妙漣が村を出てから六日目の朝は、雲一つない好天だった。

元気に畑へと向かった雷遊子は、村はずれに一頭の馬がいるのに気がついた。馬をあまり見たことのない雷遊子は、興味津々しんしんで近付いてみる。するとい

13 第一回 山裾の閑村にて

きなり、上から声がした。

「おい小僧、村長はどこにいる」

大きく重い声。その先を見ると、声にふさわしい大男が、馬上でふんぞりかえっている。

(村長さんのお知り合いかな?) などと考えながら、雷遊子は馬を家までつれていくことにした。

歩きながら、馬をしげしげと眺める。また上から声がした。

「小僧、馬がそんなに珍しいか?」

「うん。こんなに近くで見るのは、はじめてだよ」

「ほお、村から外へ出たことがないのか」

「ううん、ほかの土地へいくときは歩くか、風に乗せてもらうし、それに…」後は言えなかつた。上からの大声がそれを遮ったのである。

「なにい、『風に乗る』だとお…なるほど。小僧、お

前はあの仙人の弟子か!」

思わず間違いを正そうとした雷遊子は、ふと師の注意を思い出して、

「老師を知ってるの?」と、ことさら無邪気に問い返す。

馬上の男はその問いを無視し、更にドスのきいた声になった。

「おい、お前の師匠はどこにいる」

「老師は用事があつて、都に行つてるよ」

「ふむ…そうか。それは都合がいい」

妙な声の調子に、雷遊子は薄気味悪くなった。背中に感じた悪寒は、その後、村長の家につくまでずっと付きまとっていた。

七

雷遊子に呼ばれて出てきた村長父娘の顔色は、馬上の男を見るなりさつと変わった。

「なるほど、こんなあばら家に住んでいたとはな…さて、色好い返事をもらいたいものだな。聞けば、頼みの仙人もいないそうじゃないか」

馬上の男は、この地方を預る官吏かんじで、名は懐登かいとう。元は都の武官であつたが、ちよつとした失策で左遷になつてしまつた。何とか都に戻るつと探つたところが、都の大物が大変な色好みだといふことが分かつたので、地元のよい女を探し回つていた。

この村の村長は、昔は懐登が直接治めている町の住人だつた。娘の麗鈴が懐登に見込まれてしまい、無理やりつれ去られようとしたところを妙漣に救われ、父娘共々この村に逃げて来たのである。

ついでに書くなら、村長になつたのも妙漣の術のおかげ。だからこそ突然やつてきた奇妙な旅人が、小さいながらも整つた家と、うまい酒にありつけることができたのである。

そんな事情は雷遊子には分からなかつたが、麗鈴の表情につき動かされて、いつのまにか懐登の前に立ちはだかつていた。

「小僧、どけ」

感情のない声が言う。

「どかない！」雷遊子は型を作つた。

懐登は思はず馬を数歩さげた。数年前、妙漣にひどい目に合わされたのを、体が覚えていたのである。が、気を取り直して見てみると、子供は何を仕掛けて来るでもない。にやりと笑つて、愛用の槍を取る。「どうやら、師匠の代わりはつとまらんよつだな……麗鈴！おとなしく来ればよし、さもなれば、まずこの子を串刺しにするぞ！」

雷遊子は、型を少しずらした。たしかに、必殺の秘術なんか習っていない。とにかく結果を張つて、時間を稼ぐしかない。雷遊子は肩越しに叫んだ。

「ぼくのことは気にしないでいいよ！早く奥に入つて!!」

雷遊子は乱れそうになる呼吸を整えた。少しでも長く守るためには、少しでも後から術を使わなければならぬ。出来る限り術を使わないようにしなければ、老師は間に合わない！

15 第一回 山裾の閑村にて

「ほほう、守り切るつもりか……よおし、俺の槍、見事受けてみる！」

懐登の槍が、弾けるようにして子供に向かった。雷遊子は『光』を回し……その瞬間、雷遊子の目の前に何かが飛び込んだ。うろたえた少年は、結界を完成させ切れない。その隙間をついて、なにかに槍が突き刺さった！

その瞬間、雷遊子は時間が遅くなったかと思えた。目の前で、白っぽい布がゆっくりと紅に染まっていく。

「ああ……短い悲鳴が聞こえ、すぐに消えた。

「雷ちゃん……」

かすかに声が聞こえた。気のせいだったのかも知れない。そのまま、その体は目の前に崩れ落ちて行く。震えながら天に向かって雷遊子は狂ったように叫んだ

「ろおしいい……」

その背後に、まず最初の雷が落ちた。

都での仕事を終えた妙漣は、帰る途中でめまいに襲われた。泉碓らが心配そうに声をかける。妙漣は心配ないと手で合図し、風乗りの準備を急がせた。ふと、みんなから顔をそむけてぼつりと言う

「雷遊子……早まるなよ……」

八

妙漣が村についたとき、そこはすでに焼け野原であった。頭上には見たこともないほどの雷雲が詰めよせている。

（遅かったか……！）妙漣は右拳を左の手のひらに叩きつけ、齒ざしりした。

雷遊子……これは、空諾が緑宝寺で赤子を拾ったとき、その子が落ちてきた雷をもてあそんだ事からつけられた名前である。これを『雷』術の一種と見ていた妙漣は、本当に自由に使えるまで、この術を封じたつもりだったのだが……どうやら封じきるこ

は出来なかったようだ。

雷遊子は、焼け野原の真中に棒立ちになって、じつと下に倒れている娘を見つめていた。妙漣はその肩に手を置くと、沈んだ声でゆっくりと言つ。

「気がすんだか、雷」

弟子は呆けた顔を師にむけた。

「老師：倒せなかつたよ：けがだつて：できなかつたあつ：！」

浮かんできた涙に溶けるよつにして、その場に崩れる。その肩に、今度はしっかりと師の手が置かれた。

「泣きたいなら止めやしない。だがな、泣いてこの娘が還るわけでもないぞ。…起こつたことは仕方がない。しかし、やった以上は後の始末をしなきゃな。せめて、犠牲はこの娘だけにしたいものだな…」
最後のところは、ほとんど独り言だった。

雷雲が退いて行くのを見て、村人達が集まつてく

る。妙漣は詫びの言葉を述べると、前々から考えていたことを話しはじめた。

「…こつなつた以上、奴らが軍を率いて戻つて来るのは必至でしょう。そこでこの際、となりの国に移つてはいかがでしょうか」

村長はうなずきながら、

「わしらとて、出来るものならそうしていた。隣の国は、暮らしやすいところらしいし…だが、あんたも知つておるだろうが。あの山の向こつへ、奴らに見つからんでどうやって行くと？」

「山を越えればいいでしょう」

平然と妙漣が言つ。

「バカな！あの絶壁をどう登るつて言つんだ！」

村人のひとりか噛みついてきた。妙漣はそれを目で制する。そしてそのまま、村人たちの顔をひとつ、ひとつ、確かめるかのように眺めると、大きく息をはいて言つた。

「たしかに、登るのは私でも無理です。しかし…」

17 第一回 山裾の開村にて

と、修行を繰り返した崖を指さして、

「あそこに、人が通れるほどの穴を穿てばいいでしよう」

村人がざわめいた。論争になろうとするのを、村長が抑える。

「それが出来ると言つのなら…行ってみたいですが、あの山の向こうに」

これで事は決った。

本当のところ、妙漣にも「確実に穿てる」とまでの自信はなかった。崖の向こうへ移ることを考えてからほぼ三月、毎日のように弓を引いてはいたが、貫山弓につながる『光矢』を、今だ捉えきれずにいたからである。

しかしこうなつた以上、少なくとも人の通れるだけの穴は開けなければならぬ。村人達はそれぞれ必要な荷物をまとめていたので、とりあえずその間、エセ道士との戦いで疲れた体を休ませることに

した。

九

小さい手の感触に、妙漣は目覚めた。どうやら、村人の準備がすんだようだ。師弟は弓を取り、村人達の待つ崖へと向かう。

期待と不信のまなざしの中、妙漣は、崖から五丈ほど離れて立ち止まった。弓を持ち、目をつぶると、右手の三指で弦を握って思いっきり引き絞つた。そのままの状態で、動かなくなる。

時間が刻々と過ぎて行くが、妙漣は石像のように動かない。じれてきた村人たちの耳に、微かな音が聞こえてくる。その音は、本の僅かづつではあるが、大きくなつてきたようだった。

「蹄の音だ…」震える声で、一人が言った。

その消えそうな一言で、村人たちは大恐慌に陥つた。数人が妙漣をせつこつと、そばに走り寄る。だ

が、雷遊子の方が速かった。

「邪魔したら、ぼくが相手だよ！」

男達の動きがびたつと止まった。あの雷の土砂降り思い出したのである。

雷遊子は軽く型を作りながら、師の様子をつかがつた。と、妙漣の唇が微妙に動く。

「じきだ…雷遊子、結界の用意を…」

弟子は向き直つてうなずくと、崖に向けて型を作る。

村のはずれの方に、土ぼこりが見えてきた。いままで村人たちを抑えていた村長までが、せつつきはじめる。遠くに馬の姿が見えるまでになつたとき、ついに妙漣が動いた。目をかっつと見開き、咽よ裂けよとばかりに叫ぶ！

「光矢一閃、世に奉らん！」

つがえていない矢を放つ！

崖に、ぼつんと小さな穴が開いた。

(まさか、失敗…?) 雷遊子の心配は、すぐに氷解

した。小さな穴の周りが、その穴に向かって勢よく崩れ落ちて行く！

雷遊子はあわてて結界を張り、崩れすぎを押えにかかった。

ある程度穴が開いたところで、村長が村人たちに、早く穴を抜けるよう指示する。その合間に、娘の遺体を体に縛り付けた。雷遊子は先頭、妙漣は最後尾で結界を張り、穴を支えながら数十人が抜けて行く。

十

懐登たちが村についたのは、ちょうどその時だった。人気のない家を探り、足跡を追つて穴は見つけたものの、さすがに馬は通れない。仕方なく馬を降り、鎧姿の二十人ばかりが妙漣らの後を追つた。

結界を張りながら進むと言つのは、さすがにやりにくい。低い天井とあいまって、全員が穴を抜ける

19 第一回 山裾の閑村にて

までには、たつぶり二刻半(注)を要した。最後に出てきた妙漣が、結界を解こうとする弟子を制した。

「まだ張ったままにしとけ。今後のためにも、禍根を絶つ！」

そのまま村長の方に向き直り、

「先に行ってください。我らは、まだ務めを果たしておりませんか……」

村長は妙漣の目をじっと見て、深く礼をした。背中の亡骸が物悲しい。

誰もいなくなつた山裾に、鎧の音が響きはじめた。

師弟は目線を交わして、穴を見据えている。音が大きくなり、穴の淵に手が見えたのを合図にして、師弟は結界を解いた！

雷鳴をも上回る轟音と、もうもつたる煙に混じつて、くぐもつた叫び声が野にこだまする。

しばらくして、煙が晴れてきた。鎧を着た屍しかばねは、ほとんどが土に隠れていて、見ることが出来ない。だが、よく見ると一つだけ、土をあまり被つていない屍があつた。顔を確かめようと、師弟が近くに寄る。うつぶせの体を足で起こし……と、いきなりそれが跳ね起きた！

「この、ばけものがああああ……」

半分に折れた自慢の槍を、思い切り妙漣の体にしたき込む！

妙漣はそれを軽くかわした……はずだった。が、疲労は思ったより強かつたようで、避け切れずに脇腹を切られた。すぐさま繰り出した二の槍は何かに当つて折れる。雷遊子が、とっさに結界を張つたのだ。土ぼこりの顔が、見えない壁にへばりつく。

そこにはもう都への憧憬も、権力への執着も何もなかった。その目の色が意味するものはただ一つ――

『復讐』の二文字。

「雷、術を外せ！」

脇腹を押さえながら、三丈ばかりさがった。雷遊子も師の影にさがって、結界を解く。懐登はすぐさま飛び出した。もはや武器はない。ただ、妙漣に向かって凄まじい勢いで突っ込む！

「つつかい棒になってくれ！」と言いつつ妙漣は雷遊子に身体を預けて、複雑に手を動かした。右手で天を、左手で地を、支えるかのように置いて、型をきめる。弟子は斜めになりながら、その腰を肩で押さえる。

「——今一度、大気よ天地に還るべし……天・地・封・殺!!」

叫びながら、上下に置かれた手を、胸の前で叩き合わせる！

風が土を舞い上がらせ、目の前はまったく見えなくなる。雷遊子は師を支えきれず、一緒に背中から倒れ込んだ。

「老師、老師！やられるよ!!」

妙漣は、何も言わなかった。

十一

土がおさまり、目の前が見えるようになっても、懐登の攻撃はなかった。

「老師、いまの何なの？あいつは、どこのの？」

妙漣は苦しそうに半身を起こすと、ただ黙って目の前の地面を指さした。

弟子はそこをよく見て……おもわず吐きながら、目を背けた。そこには、今の今まで鎧をつけた人間だったものが、布のように薄く潰れていたのである！

「こんな……ここまでやらなきゃいけないの？」雷遊子は、もう涙声だった。

「それは敵だぞ……敵のために泣くか？」

「敵だって！敵だって……やっぱり酷いよ!!」

弟子の言葉に、妙漣の目から涙が落ちた。

「酷いか……そうだ。その心を常に持たなければ、真

21 第一回 山裾の閑村にて

の術師とは言えん。ただの人殺しだ——
肩を貸してくれ。まだ、休むわけにはいかない……」
弟子は師を立てせて、山を後にした。

しばらくしてから、涙をぬぐって問いかける。

「老師……老師は、ぼくを試すためだけに、あんなことしたの？」

師は、しばらく黙っていた。雷遊子はもう一度問う。今度妙漣は、わずかに微笑んで答えた。

「まだまだ修行が足りないな……」

要するに、俺も麗鈴が気に入ってたってことだ」

数日後、師弟は北へ向けて旅立っていた。

仙道との間に亀裂が生じないように、また、村長が娘のことを考えないでも済むように……

妙漣はこの後、緑宝寺に嘆願して『天地封殺』を封じた。また、雷遊子も、生涯『雷』の術を使うこととはなかった。

それでもなお、あの閑村で過ごした数年は、雷遊子にとり、もっとも楽しい思い出として、心に残ることになった。

むかしのはなしである。

注

一 五丈……当時の一丈は約³m

二 二刻半……当時の一刻は約15分

第二回 緑宝寺の盤印

一

さて、むかしのはなしであります。

いまで言つところの中国の西の方、岩だらけで人も少ない荒れた土地に、いつごろからか、一つの小さな森ができました。

この森、はじめは小さな緑の塊のようでありましたが、時が経つにつれて大きくなり、ついには辺りの岩山を覆い尽くしてしまいました。

森には、多くの虫が集い、鳥がかよい、けものが見まわし、やがて、そのまわり人が落ち着きはじめます。

人々は、その森の縁で薪たきぎを取り、獣を捕まえる日々を送つておりました。しかしながら、かれらも森のなかへは行こうとしません。行こうとすると、なぜか突然恐怖に襲われて、先へ進めないのです。

いつしか、その森は『神農しんのうの森』と呼ばれるようになりました。

神農といひますのは、古代中国の神様のひとりで、農業と薬の神様であります。ある日のこと、村の若者が重い病気にかかり、助かる見込みがなくなつたとき、試しにこの森のはずれに寝かせておいておいたところ、数日後には歩いて村に帰つてきたことから、疑い深い者達も、この名を信じざるをえなくなつてしまいました。

この男、その時のことをこう語つております。

『熱にうなされながらぼんやりと辺りを見回していたらよ、森の奥から、白い服を着た大柄の男が出てきたんだ。そばまで近付いてきて、何度か胸の上の手のひらがざしたら身体中がスツと楽になつちまつた。声が出せるようになったんで、「神農様、ありがとうございます」と言つたら、相手は笑つてこう言つたよ。「私たちも忙しいから、いつでも治してあ

げられるわけではない。あまり人には話さないように「つてな」

以来、「神農の森」は「聖森」としてだけ呼ばれ、神農の名は出されなくなりました。しかし、「聖森」の名を呼ぶとき、かれらの心の中には、いつでも「神農」の名があつたのです。

「聖森」は神様の別宅で、そのお友達、あるいは神様に近付けるほどの偉い仙人様が立ち寄られる場所なのだ、かれらは信じておりました。ですから、たまに妙な人が森の中へ入って行っても、特に詮索もせず、むしろ心中では歓迎さえしていたのです。

森の中に住んでいたのは、実は神でも仙人でもありませんでした。とはいえ、ただの人間と言うわけでもまたありません。かれらは自らを「術師」と呼び、この森に囲まれた建物を「緑宝寺」と呼んでおりました。

むかしのはなしであります——

二

その日、泉碓は疲れた体を引きずりながら、緑宝寺へやってきた。

いつもの通り門を抜け、そのまま部屋へ向かおうとする彼を、門番がひきとめる。

「泉碓どの、緑宝寺がお呼びですが」

呼び止められた方は、ちよつと首を傾げた。

（ここところ、直々にお呼びがかかるようなまねなんか、してないはずだがなあ……）

ともかく、相手はこの緑宝寺の長。呼ばれているなら出向かねばならない。彼は門番に礼を言つと、中堂へと向かった。

中堂は、緑宝寺をはじめとする最高師範格の者たちの在所と、集会場を兼ねた場所である。先の戦いで空魔を封じて以来、集会場として使われたことはないの、泉碓もその中には詳しくない。大きな扉をそろそろと開け、中の様子を伺つと、奥から軽や

かな声が響いた。

「来ましたね、泉碓。さ、早く入って」

第十五代緑宝寺、空諾は、しなやかな体に軽くよく通る声、決して飾らない口調と身支度で有名である。弱冠十三才で緑宝寺になった彼は、現在二十才。最高師範位の術師たちより遙かに若い彼をそれでも慕う者が多いのは、その性格によるところが大きかった。

泉碓は扉を後ろ手に閉めると、礼をとる。

「碓術師範、秀泉碓。命により参上つかまつりました」
空諾は軽く微笑むと、席を立ち、泉碓の前まで歩いて行った。

「仙道との交渉、苦勞さま。さあ、とにかく座って」

客は空諾に導かれて、上席につく。

「え、と……」

緑宝寺が定席につくと、話しを切り出した。

「帰った早々に呼び出して悪いんだけど、妙漣どのと雷遊子の様子を聞きたいんだ。見てきた限りでい

いから、話してもらえないかな」

泉碓は少し肩をおとし、ため息をついた。

「変わりませぬね、緑宝寺どの。もう少し命令口調にして頂いた方が、こちらとしても、やりやすいのですが……」

「まあ、いいから、いいから」

あくまでも明るい声である。泉碓は再びため息をついた。

実のところ、空諾がここまで気さくな面を見せるのは、ごく一部の者にたいしてのみ。現に妙漣のことは『どの』『つけで呼んでいる』、他の最高師範格の者たちや、若い術師見習いたちと話すときには、それなりの威厳と言つか、そういったものを漂わせてはいる。……だが、泉碓ほどに世間の波にもまれた者から見ると、どうしても甘さが目立っているように見えるのである。

とはいえ、彼、空諾を見かけだけで判断してはなら

ない。先代の緑宝寺、影焼えいしょうに拾われてからわずか一月で押さえ方の術師となり、一年後に最高師範、その直後には緑宝寺代行にまでなつた彼の術には、誰も逆らうことのできないものがある…そのことを、誰よりもよく心得ているからこそ、泉碓のため息は妙に重いのである。

大きくひと呼吸して、泉碓は話しはじめた。

「雷遊子の調子は上々のようです。特に『殻』の境界においては、師の妙漣すら及ばないほどとか」

へえ、と空諾。

「すごいね……妙漣どのと言えば、むかし、あなたと組んでいたときには守りの専門家だったんでしょ？ それをも凌しのぐとなると…」

「はい。…ただ、まだ幼いこと、もともと素質があまりすぎることから『閃』ではなく『明』に頼る傾向があります…」

術師の術と言うのは、かれら言うところの『光』(目に見える光と区別するため、『光雷』と呼ばれる場合もある)を使って行うものである。

『光』は、大きく二つに分けられる。すなわち、人の中にある『内光』と、世に不偏的にある『外光』である。術師は、『内光』をある特定の形に動かし、『外光』を変化させることによって、様々な術を使うことができる。

『閃』と『明』というのは、この『内光』の状態を表すもので、その人が本来持っている『内光』の量を『明』、術を使うときに、集約される『内光』の強さを『閃』で表す。実際の術の強さを決めるのは『閃』なのだが、『明』があまりにも多すぎる場合には、十分な『閃』がなくても、強い術を使える場合がある。雷遊子は、この希まれな部類に属するのである。

「…そのため、ちょっとした事件に巻き込まれてしまったようですが…」

「ああ、それなら知ってるよ」

空諾の声が、少し重くなる。

「つい二、三日ほど前だけど、哨朔しやうしやくを使いによこしたんだ。なんでも、『天地封殺てんちほうかく』を封じたいとか言うてね。で、いろいろと聞いてみたんだけど…あれは一種の事故じゃないのかなあ…」

「私もそう思います。性格でしょう、あの悩みやすいところは」

二人は顔を見合わせて、やれやれといった表情になった。

「ま、雷遊子らいゆうこが順調なのがなによりだね。じゃ、すまないけど泉碓いずみづ、ひと休みしてから、もうひと働きしてくれないかな」

泉碓、すつくと立ち上がり、礼を取って

「は、喜んで」

その態度に思わず苦笑いしながら、緑宝寺は奥へさがった。再び出て来ると、その手に小さな袋がひとつ。

「君の弟子のうちの誰かに、これを妙漣めうれんどのに届かせて欲しいんだ…まあ、悩みよけてとこだね」

言いながら相手に渡す。泉碓が中身の感触を確かめるように触っているのを見て、空諾が楽しげに言った。

「念のために言うておくけど、その袋は妙漣どのにしか開けられないよ。」

あなた自身には、別の仕事を用意してる。あまりいい役でなくて悪いんだけど……」

泉碓は、自分の役割を聞いてわずかに顔色を変えた。

三

緑宝寺を離れること、六百里あまり。都とは比べるべくもないものの、なかなか活気のある町に、妙漣めうれん師弟がやって来て三日ほど。泉碓から連絡があり、この町で落ち合う事になっていたのだが…約束の日から二日がすぎてても、なんらの音沙汰もない。

待つこと自体はさほど辛くるくもないが、その相手が

泉碓となると話しは別。『奇策の泉碓』などという二つ名を持つ彼ではあるが、少なくとも自ら約束したものを違えた事(たが)は一度もない。妙漣が心配になるのも無理(むり)からぬことではあった。

心配(ご)とはもう一つある。弟子の雷遊子である。

術師としては飛躍的な進歩(と)を遂げているものの、まだ七つ八つの子供。他人の死に直面して耐えるのはそうたやすい事ではない。ましてや、その内の一人で、実の姉のように慕っていた麗鈴(れいりん)に至っては、自分のせいで殺してしまったも同然…となれば悪夢にうなされたからと言って、誰が責められるだろう？

弟子に余計なことを考えさせないようにと、宿の中でも修行は続いていた。

部屋の中央に立てられた一本のろうそく、その炎が、風もないのにふっ、と消える。いや、よく見ると消えたのは炎だけではない。先端(せんたん)のろうと芯(こ)が、丸(まる)こと

消えているのである。

じじじ…と、わずかに火の燃える音。それは、妙漣の手のひらで幽(か)かにゆらめく、ろうそくの先端だった。それを、部屋の隅にいる弟子の方に近づけ、『やってみろ』と目で指図(さしず)する。

だが、弟子は動かない。師は手の炎を握り潰し

「雷、お前の『殻』の結果は本当に見事だよ。それに関する限り、いま対抗できるのは緑宝寺の、いわゆる『空諾の絶壁』しかない」

そばで冷たくなった茶を、くい、とあおる。

「だが、なぜ攻撃(こうげき)が出来ない？ 守りのみで勝てる戦(いくさ)はないぞ」

じろり、と問いかける目をはずし、雷遊子はつむいたまま、ぼそぼそと

「いいんです。ぼくは、結果(けいこ)だけで」

師は軽(かろ)くため息をして、

「結果(けいこ)だって、使う人が使えば強い武器にもなる。いいか雷遊子、争(ま)いはいつ起こるかわからん。いつお

前や私が危機に落ち入るかも知れないんだぞ。

……先曰『天地封殺』を封じたるように求めたが、これが聞き入れられれば、私はほとんどの術を使えなくなる。」

弟子が顔をあげた。きよんとしている。

「言つてなかつたかな。私の源流としての術は、以前大役を降りたときに、その大部分を封印してしまつたんだよ。今までお前が見てきたのは、ほとんどが剛流こうりゅうの術だ。」

「そんな…それじゃ、ぼくは剛流の術師になつちゃうの!？」

妙連は首を振つた。

「源も剛も、同じ衝派だ。基本は同じなのさ。ただ得意な分野が違つただけでな…ん?」

部屋の中で、『風』が揺れた。誰かが、風に乗つて来る証拠だ。

『光』がただの光でないように、『風』も普通の風

ではない。この世をくまなく流れ続ける、風のごとき光『風光』の道。それと一体に——『乗れ』れば、瞬時にして数十ないし数百里先まで飛んでゆくことができる。……ただし、行く先はまさに『風』まかせではあるが。

妙連はとつさに『圧風』の型を作つて待つた。相手が何者であろうとも、『風』から出てきた瞬間ならばこれで押し戻せる。

しかし、術を使う必要はなかつた。風から出てきた人物は、すぐさま源流の正式な礼をとつたのである。

「妙老師、お久しぶりでございます。」

聞き覚えのある女性の声。その主は、十五、六くらいの小柄な少女だった。

「緑宝寺よりの急の使いですので、不作法をお許しください。」

「李姐しじょう!」

見知つた少女の顔に、思わず、雷遊子が飛び付いた。

29 第二回 緑宝寺の盤印

「やあ、李二娘か、久しぶり」

李と呼ばれた少女は、雷の頭を撫でながら、

「積もる話もありますけど、まずは仕事を片付けなくちゃいけませんわ。…さ、雷ちゃん、ちよつとはなれてね」

少女は雷を脇へよけると、懐からひと包みの袋を取り出して、妙漣に渡した。

妙漣が袋を受け取ると、手の平の上でそれは勝手にほどけた。中に入っていたのは、竜の文様がほどこされた小さな円盤に、ひと巻きの竹筒。

その円盤を見て、妙漣と少女の顔色がさつと変わった。

「まあ…これは…!」

「盤印だ、緑宝寺盤印…四代の呪具…!」

興奮する二人をかわるがわる見て、雷遊子は首を傾げながら

「何なの、これ…?」

おや、と弟子をみながら、

「そうか、お前にはまた言っただけな。まさか、この目で見ることになるとは、思ってもみなかったからなあ……」

これは、緑宝寺の盤印と言つて、緑宝寺が代役をたてるときに使うものだ。第四代緑宝寺の御代に作られたので、四代の呪具とも呼ばれるが…今の十五代に至るまで、使われた事は二度しかない。それも、緑宝寺が自ら空魔討伐に出るため、次代の緑宝寺に手渡したというだけで、緑宝寺になるべき人以外に渡されたことはないんだ」

「それじゃあ、老師が次の緑宝寺?」

期待に満ちた顔に、思わず妙漣は苦笑した。

「いや、なれない。…資格がないからな。しかし、それを承知の上でこれをお貸し下さるとは……」

「緑宝寺が心底、妙老師を信頼している証拠ですわ」少女の目が細まった。『悩みよけ』ってこういう意味だったのね…

印をじつと見つめている妙漣の手から、竹簡が落ちた。拾い上げて眺めていた顔が、急に真剣になる。その変化を見て、少女がたずねる。

「妙老師、緑宝寺さまからはなにか…?」

「おまえな、『老師』はやめるよ。おれはもうおまえの師じゃないんだぞ」

少女はただにっこりと笑って応える。師のほうも、どうやら何を言っても無駄と悟って、

「簡単に言つとだな、次の戦いでは盤印を使いたいから、使い方を教えてもらつてこい、つていうことらしい」

「教えていただく、ですつて！老師にわからないものを、誰に聞けつて仰しゃるんです!?!」

突然の劍幕に、師の方が氣圧けあつされた。どうやらこの娘にとつて、妙漣以上の存在などあり得ないようであった。

「この文が間違つてなければ、『北岩ほくがんの術師』とやらが知っているらしいな」

「北岩…聞いた事ありませんわ。泉老師ならひよつとするとご存知かも知れませんが…」

これを聞いて、妙漣はわずかに安堵あんどした。本来の師——泉碓より自分を上に置いているようなら、これは大問題である。

「おまえが知らないなら、泉碓も知らんぞ。…ま、いまの緑宝寺はいいかげんな事を言うお方じゃないから、書いてある通りにしたほうがいいだろう」

読み終えた竹簡をじゃらりと、やや乱暴に丸めたあとで、妙漣は妙な感じを受けた。なにか、まだ続きがあるような…。試みに、竹簡を思いつきり開いて見たら、最後のほうに何かを感じる。両手でその部分を持つて見ると、しつかりとした竹の板から、薄皮のようなものはらりと、と剥がれ落ちた。ぱつと掴んで裏をかえすと、細い文字で一文。

——戦なくして、將は育たず——

「まったく、あの方らしいなあ…黙つていればわか

らないのに……」

ぼつり、とつぶやく師の様子に、少女は心配そうな顔になった。

「どうかなさったんですか、妙老師？」

「いや、その印を狙ってくる奴がいるかもしれないから、気を付けろってさ」

言いながら手早く薄皮を砕くと、奇妙なほど明るい声で

「ところで李二娘、すぐ緑宝寺へ帰るのかい？」

「いえ、しばらくこちらにいるように言われていますが、あの……」

困ったような声。妙漣ははたと膝を打って、

「そつか、すまん！一人で緑宝寺を出たってことは、きみも師範資格を取ったんだよな。……で、呪名は何と？」

「はい、いまは鈴術れいじゆの師範で『泉麗鈴せんれいりん』を名乗っています」

雷遊子の体が、いきなり跳ね上がった。おびえた

ような目で彼女を見ながら、いやいやをするように首を振る。麗鈴が不思議そうな顔で近づこうとすると、だつと奥の部屋に駆け込んだ。

残された少女は当惑ぎみに

「わ、私、なにか悪い事でも言いました？」

「いや、おまえのせいじゃないんだけど……」

口こもりながらも、妙漣は山裾の村での一件を話しはじめた。

四

寝室の奥に、雷遊子がへばりついている。麗鈴はそつとそばによつて、

「雷ちゃん……」

雷は麗鈴に背を向けたまま顔をあげた。

「李姐は、ちがうよね？」

「ええ、別人よ。でも、偶然とはおもえないわね」

泣き顔がゆつくりと振り返る

「何があったかは、妙老師から聞いたわ」

「…ぼくが悪かったんだ。ぼくの術のこと、もっと言っておけば、お姉ちゃんはお姉ちゃんはおくをかばったりしなかった——」

涙に溶けるかのように目をつむろうとする雷遊子の顔を、麗鈴はぐい、と引き起こした。

「そうしたら、その娘のかわりに、あなたが死んでたわ」

「そんなこと——」

きつい目線を受け、雷遊子はもうそれ以上口を開けなかった。

「戦いを甘く見てはいけないわ。あなたの結果は本当に強いけど、無駄が多すぎるの。老師も言ってたわ『あれじゃ二刻ともたないだろう』って」

口を開けても、言い返す言葉がない。少年は唇を噛みながらうつむく。

「あの娘は死んで、あなたは助かった…これは、もう誰にも変えられないわ。…でもね、雷ちゃん。あ

なたはまだあの娘にしてあげられることがあるわ」

うつむいたまま、ぼそりと

「してあげられること…?」

「そう。あの娘はあなたを助けた。…いまはただ一人の人間を救ったにすぎないわ。けど、あなたがこれから多くの人を助ければ…そうすれば、彼女はあなただけじゃなく、もっともっと多くの人達の恩人になることができるの」

「でも…術師は人を殺すよ。どうして助けられるの?」

雷遊子の言葉は、質問と言うより、ただ自分を責めているように聞こえた。

「私たちが人を傷つけるのは、自分の身を護るため、仕方ない場合だよ。私たちの敵は空魔くまだけなんだから」

「どうして空魔を倒さなきゃいけないの?」

麗鈴は一瞬唖然あぜんとしてから、気を取り直して、
「雷ちゃんはなぜだとおもっ?」

「空魔の気による害を我等の許で留め、天下の太平を維持するため……?」

まさに棒読みである。少女はくすくすと笑って

「妙老師がそうおっしゃったの? 困った方ね。愛弟子の前でまで照れることないのに……」

ふう、とため息をひとつついて、雷の目をまつすく覗き込む。その眼光に、逸らすことさえできない。

「ね、雷ちゃん。空魔の気が強くなると、どうなるか知ってる?」

「えっと、たしか……竜の姿がぼんやり見えて、頭が殴られたみたいに痛くなって……」

「そうね、本人はそうなるわ。とつても苦しくて、たまらないものよ。でも、気に強い回りの人には、そんなことわからないの。気に当てられたのが、ちゃんとした大人なら、なんとか我慢もできるでしょうけど……もし、子供だったら……」

今までの強い眼光がうそのように消えて、なかば首を逸らす麗鈴。その姿に、雷遊子はたまらず聞いた。

「どう……なるの?」

「……捨てられるわ。『呪われてる』なんて言われて、ひどいときは、殴られて……声も出せないくらい……縛られたり……!!」

最後のほうは掠れ声。しばらく二人とも、ただ黙って相手を見つめていた。

「……妙老師は、そういった子供たちを拾って来ては、弟子にしていたわ。私もその一人よ。……それはね、老師自身もそうして拾われたからなの。でも、世の中にいるそんな子供たちを、一人残らず拾うことはできないわ。」

……空魔を倒さない限り、そんな子はけっしていなくなるならない。だから、空魔打倒のために術を磨いているのよ。少なくとも、妙老師と私は、ね」

雷遊子はしばらくうつむいていた。だが、やがて手の甲で顔をこすると、大きく吸った息を強く吐き出しながら、思い切つて顔をあげる。

「わかったよ、李姐。ぼくもやる。老師や李姐と一緒に

に、ぼくみたいな子供を世の中からなくしてやる！

……それで、お姉ちゃんも喜んでくれるよね……」

また涙で曇りそうな目を、我慢して開けている。その顔をそっと抱き寄せて、少女が言った。

「そうね……雷ちゃんが一人前になったら、きつとね」

一瞬みせた、寂しそうな麗鈴の表情に、雷遊子が気付くことはなかった。

五

雷遊子を寝かしつけて、居間のほうへ戻って来た麗鈴に、妙漣が声をかけた。

「聞こえたぞ」

ぶすつとした声にも、麗鈴は一向にこたえない。

「いいじゃありませんか。うそは言ってませんよ」

多少いじわるな目線を師に投げかけながら、茶をいれる。師のほうはそれを軽くあおって、

「ま、あのくらいで納得してくれてよかった……あい

つこの体ことは、まだ言いたくないから……」

「やっぱり、だめなのですか？」

心配そうな表情を見て、師の顔が締まる。

「七割がた、といったところだ。次に空魔があらわれるのが何年後か、はつきりとはわからないが……そのときに倒せなければ、おそらくあいつにその次はない」

「まあ……」

「自分の身を護るためには、なんとしても空魔を倒さなければならぬ……むしろ、そうはつきり言ったほうがいいのかもしれないなあ」

寝床をのぞきながら言う妙漣の言葉が終わりきらないうちに、麗鈴は口を挟んだ。

「いいえ、妙老師のやり方は正しいとおもいますわ。

あの子は、老師に似てます。だから……だから姉も、思わず庇かばったのでしょね」

少女の顔色がわずかに変わった。妙漣はそれを正視できなかった。

「きみのお姉さんには、本当に申しわけないことをしたと思つている。すまない…」

目線をあわせることもできず、ただ頭を下げる師の肩に、麗鈴はそつと手を置いた。

「顔を上げてください、老師。…姉は老師のおかげで、普通の人として生きられました。感謝をしても、怨むわけありませんわ」

麗鈴はまた茶をいれた。今度の茶は、なかなかくならなかった。

六

明けて翌日。雷遊子はどうやら完全に吹っ切れたらしく、朝早くから外で駆け回つている。師のほうは、珍しくもやや遅れて起きだして、麗鈴が作った朝食をとる。と、ここまでは平和な朝の風景だったのだが…

饅頭まんぢうを頬張りながら、ふと棚の上を見ると、昨晚

置いてあつたはずの盤印がない。麗がしまったのか、と思つて尋ねてみると、知らないと言つ返事。しかたなく食事を途中で切り上げ、印を探しまわる。

そこへ歸つて来た雷遊子

「なに探してるの？」

と、のんびり問いかける。

「印だ。あずかつた盤印をどっかやつてしまつたらしい」

「棚の上にあるの、違うの？」

言われて棚を見上げる。が、印どころかほこり一つない。

「雷、いいかげんなことを言つな！」

師の剣幕にちよつと気後れたものの、雷遊子も言い返す。

「だって、そこにあるじゃないか！ちよつと光つてるけど…」

「光つてる？」

師は、ちよつと考え込むと

「それなら雷、印を取ってみろ」

弟子は、棚の上で手を動かして、何かを掴んだ様子になる。そのまま振り向いて、妙漣の前へ。

「はい。これでしょ？」

「よし、じゃあ右の手のひらへ乗せて……」

雷遊子が右手を差し出すと、師はその上を指二本を乗せ、ヤツとばかりに気合を一つ。手の上には見る間に盤印があらわれた。

「『隠光界』……か」

「結果で隠すなんて……でも、いったい誰が？」

妙漣はその問いを全く無視して、ぼそっと一言

「二人とも、覚悟しとけよ。もうのんびりとはしてられないぞ」

言いながら振り返ると、雷遊子がない。

「……どっいったんだ、あいつ」

「雷ちゃんなら、なにか片付けてくるとか言って、おもてへ……」

「……すばやい奴だな」

妙漣は呆れがお。弟子は楽しそうに

「雷ちゃんは、ほんとに妙老師の性格をよく心得てますわ。先ほどの言葉で、すぐにもこの家を出るつもりだと思って、なにか忘れ物でも取りに言ったのでしょう」

師は居心地いしこちの悪そうな顔をして、黙ってしまった。

と、いきなりおもての戸がバタンと開いて、となりのおばさんが駆け込んで来た。

「た、たッ、大変だよ！ お前さんの子供が、道の真ん中でいきなり消えちまったよ!!」

(しまったッ！ 奴ら、もう動きやがったか!!)

心の中で拳を叩きつける妙漣の目が、ふと違和感のあるものを捉えた。

「……ん？ おばさん、その木簡は？」

「え？ あ、これかい？ 子供と入れ代わりに出て来たただけどき、あたしにや読めないから持って来たんだ」

ほい、と木切れを妙漣に渡す。かれはおばさんに礼を言つて引き上げさせると、それを読みはじめたが、すぐにわなわなと震え、憎々しげに地面に叩きつけた!!

「どうしたんです、雷ちゃんはいつたいい!!」

麗鈴の言葉も、なかば震えている。しかし、師は口を開こうとしない。

うつむくその顔を下から覗きこむようにしたとき、妙漣はいきなりがば、と顔を上げた

「さらわれた。雷の命が惜しくば、盤印を持ってこいだと!!」

七

妙漣たちが呼び出されたのは、町の近くの河原だった。酒れかかった川の近くに、相手と思しき男たちがいる。

「ちゃんと印を持ってきたぞ、雷はどこだ?」

妙漣の叫びに、一人の男が前に出る。

「心配しねエでも、ちゃんとおるわ!」

指さす方を見ると、雷遊子が河原に立っている。いや、師の方に行こうとしているのに、何か壁のようなものにはばまれて、行くことができない様子。

「結石か!」

結石とはごく初歩的な呪具で、文字どおり境界術を封じ込めた石のこと。普通に使われただけなら、雷遊子でも破れたかもしれないが、よくみると、雷の回りには八つの結石が、正しく八方に置かれている様子。いわゆる『八方界』という手法で、これをやられると相当の術師であっても、崩すのは至難のわざ。

これは他に手がない、と悟った妙漣、苦い顔で、

「盤印はここにある。さ、雷を放せ!」

「その手に乗るかい。印を持ったまんまじゃ、あぶなくっていけねエ。まず、そいつをこっちに投げな、そうすりゃ弟子は殺さねエぜ」

やむなく、印を投げる。今まで黙っていた男が、影からさつと走りよって受け取ると、

「ほれ、狼兄イ」

と、印を渡す。

「さ、雷を返してもらおうー」

狼、と呼ばれた男、にやりと笑つと、

「印さえ手に入れば、おなえらなんぞ用済みよ。…死になッ!!」

ばつ、と印を掲げ、口中で何やら唱える。すると、妙漣と麗鈴の二人が、一言も発せず、その場に崩れ落ちてしまった。

雷が必死になつて壁に腕を叩きつけるが、外からはその音すら聞こえない。

「さ、引き上げっか」

「ちよつと待ってくれ、狼兄イ。念のためだ。とどめ刺しておいた方がいいぜ」

狼は、ちらと相手を見て、

「好きにしるよ。ただ約束は約束だ。あのガキは殺

すんじゃねえぞ」

「へいへい。ま、出らんなきや四、五日でお陀仏だ。それこそ余計な手間つてもんだあな」

言っている間に、狼は風に乗って行ってしまった。

一人残つた男は、腰の小刀をぬいて、ゆつくりと妙漣の方へ近づいてゆく。

八

さて、ここはとある山中に、自立たぬように作られた洞窟…と言つよりは城に近いもの。先ほど印を奪つた男が、この城の一室にやってきた。

「応師おんしどの、ただいま戻りましてござる」

声に応じて、奥の方で動きがあった。一段高い席についていた男が、すつくと立ち上がったのだ。

身の丈七尺ななしちはあろうかという割には細身。袈裟けさとも道服ともつかない服をばおり、頭から鼻までを赤い薄布で覆つといった、まことに奇怪ないでたち。

「例の印をお持ちしました。どうぞお検^{あつた}めを…」

九

さつと近づいてこようとする男を手で制し、手に入れたいきさつを聞く。が、話しを聞くことに首が

斜めになり、ついにはぶつぶつとつばやきはじめた。

「弟子たちのため、総師範の位^{くわい}さえあつさり捨てた男だ。いまさら身代わりになつたとて驚きはせぬが…」

その瞬間、異様な気配を感じた。出所^{でしよ}は見^みるまでもない。目の前の盤印に決ま^きまっている。

「愚^{おろ}か者！ なにか仕掛^{しか}けられたな!!」

巨体を揺るがす叫びに、印を持った男が震え上がる。

「衝派^{しやうは}の連中に、ここを見つ^みつけられるわけにはいかん。

それを持つて、すぐにその河原とやらへ戻れ！ 妙漣^{せうれん}と、その弟子たちすべてを始末^{しまつ}するまで、ここへの出入りはならんぞ!!」

狼はまさにほうほうの態^{たい}で、例の河原へと向かう風に乗^のっていった。

一方こちらは河原の男。

妙漣^{せうれん}まではあと数歩。まったく動かないその体を見て、なんとなく不安を感じ、いつきに飛び掛かろうと歩を早めた、その途端^{とたん}、ずでんツ、とひっくりかえってしまった。

「あ、足が…動かん!」

「動くまい。こいつは俺の本呪^{ほんじゆ}だから、ちよつとやそつとじゃ破れんぞ」

びっくりして見上げた先には、何と、いまのいままで倒れていたはずの妙漣^{せうれん}が、にやにや笑いながら立っているではないか!

「俺の漣^{れん}術はさざなみの術だ。弱く見えても、絡^{から}めとられるともう動けん」

「くツ!」

怒りに任せて、妙漣^{せうれん}に刀を投げ付けようと腕を振り上げたその時、

りりいん

と、鈴の音ひとつ。と同時に、腕が言うことを聞かなくなる。いや、それどころか、身体全体がまったく動かなくなってしまった。

「鈴術は『光』を絡める術…なまじの力では、逃れられせんわよ」

と、こちらは麗鈴。男は歯噛みして、

「貴様ら、印の力にやられたんじゃねえのか！」

妙漣は思い切り笑って

「緑宝寺の秘法を、そう簡単に渡すと思ったのか？ あれはただ、お前たちの首に鈴をつけるための道具にすぎん。…ま、お前が残ってくれたんで、追っかける手間が省けたがな。さて、おまえさんたちの正体を言ってもらおうか」

「そんな必要はねえッ！」

妙漣師弟が振り向くと、風から降りたばかりの狼が立っていた。とっさに漣、鈴の術で絡めようとしたものの一歩遅い。狼が懐からさつと取り出した石

を投げ付けると、二人とも地面に這いつくばってしまつた。

「あ…『圧石』…!?」

「こ、こんなもので！こいつらいつたい…!？」

妙漣たちから少し遠く。雷遊子は、何とか師の加勢に行こうと必死にもがいていた。

しかし、押せど叩けど、体当たりさえ壁に跳ね返されてはどうすることもできない。…いや、そうだろうか？

雷は、師の言葉を思い出していた。結界術だって、使い方によっては武器にもなる…

「そうだ。ばくだって結界なら使える…！…よあし、こんなもの、こわしてやる！」

雷遊子は自分の結界を張って、押し広げはじめた。だが、回りの結界は一行に動かない。

そうこうしているうちに、男たちが師にとどめを刺そうとしているのが目に入る。

「老師！李姐！！」

叫び声も、壁の中でむなしく跳ね返るばかり…

「…また…ぼくの目の前で…いやだ！…もういやだああ！！」

叫ぶ彼の手の先に、さきほど張った結界が集まってゆく。いや、集まるだけでなく、見えるはずのない結界が、とんでもない光を発しているのだ。

雷はそれを、まるで掴むかのようにして腕を振り上げ、そのまま思い切り振りおろす！

…するとどうだろう。いままでびくともしなかった八方界が、まっぴたつになったではないか！！

破れた結界を支えきれなくなった八つの結石は、粉々に砕けて宙に舞い上がった。雷の回りに降り注いだ結石の粉は、彼の持つ強い『光雷』と呼応して、黒くきらきらと光ながら彼を取り巻いていた

怒りに燃える雷遊子の表情とあいまって、その姿はまさに雲を身にまとった雷公のよう。結石の砕け

る音に驚いて振り向いた男たちも、これには度肝をぬかれた。

「な、なんだあれは!?」

ほんの一瞬、彼らの注意がそれた。圧石の力が、わずかに弱まる。

これを逃す妙漣ではない。すぐさま得意の型を作り、全力を注ぎこむ！！

「がッ！し、しまつた！」

男たちが気付いたときには、麗鈴の鈴術まで食らったあと。もはや指の一本も動かない。

「いまだ雷、もう一度いまの術を！」

黒い雲がゆらりと動いたかと思うと、敵に向かってダツと跳んでゆく。頭の上にはさきほどと同じ、白く輝く結界の塊。

「くツそおーガキなんぞに、や、やられて、たまっかああ！！」

狼が渾身の力と光を振り絞って圧石を雷のほうへ向けると、雷が白い光輝を投げ降ろすのがほぼ同

時に決まった。

「巨石が砕け散ると、狼の体が半分消し飛ぶのも、ほぼ同時だった。だが、光輝はそのような細かなものなどまったく意に介さず、その持てる力を、大地に向けて振るっていた。」

「やれ」と命じたとはいえ、そのあまりの凄まじさに茫然とする妙漣。はたと正気を取り戻すと、そこにあるのは、ただ巨大な爪痕。「尺」の単位では気が遠くなるくらい大きな穴に、川の水が流れ込んで池となっている。澄みはじめたその水面には、血糊のついた布の切れ端がちらほらと浮かんでいる。

少し離れたところにいた麗鈴。ふとそばに人の気配を感じて振り向くと、そこに雷遊子がいた。心気が抜けたようにぼーっと立ち、ぼつり、と言つ。

「今度は、守れたのかな？」

「そうね」

麗鈴が、にっこりと笑つて言った

「これで、雷ちゃんは二人助けたわね」

雷は、微笑みを浮かべながらその場に倒れこんだ。

十

突然できてしまった池のほとり。師弟は、そこに座り込んでいた。

近くにある森の中から、ときおり鳥が水を求めに飛び出して来る。はるか遠い町の方から、物売りの声がかすかに聞こえる——ほんの少し前のことが、悪い冗談のようだった。

疲れて眠ってしまった雷遊子の頭を、麗鈴が膝の上に乗せてやさしく撫でてている。撫でながら、なんとも不思議な気持ちになった。これが、さつきあんな術をつかった子だなんて……

「老師、あの術は……？」

妙漣も、同じ気持ちだったのかもしれない。やさしげな表情をふつ、と隠して

「うん。やりかたからすると結界刃だが…とても刃なんて生易しい代物じゃないな」

「ええ。まるで…まるで竜の爪みたい……」

夢見るような顔の弟子を横目で見ながら、師は顎をさすった

「爪か、なるほど…うん、そつだな。なら『白竜爪』とても命名するか。…こいつがはじめて編み出した術だし、そのくらい派手でもいいだろ」

言いながらごろん、と横になる。どうやら、昼寝を決め込むつもりらしい。「二人は無理ですよ」という麗鈴の言葉に、じろりと目だけでやり返す。くすくすと笑う弟子の顔からそらした目が、他に動くものを捉えた。

黒服に見を包んだ男が一人、こちらに向かつて歩いて来る。夏の盛りでこそないが、早足で歩けば汗ばむこの季節に、このいでたちは明らかにおかしい。師の目の色が変わったのを見て、弟子の方もその男

に気付いた。

「新手でしようか?」

妙漣はあくまで起きよつとせず、

「無視だ。雷がこれじゃ、防ぎよつがない」

ぼそぼそとやり取りしている間にも、男は近づいて来る。合わさるまであと十数歩、といったところで、黒服の男がいきなり手を合わせた。

「いかん! 麗、寄れつ!」

麗鈴が師につかまり、妙漣が雷を引つつかむや、一陣の『風』が彼らを吹き飛ばした。

十一

「…い、雷、しっかりしろ!」

老師の言葉に目を覚ました雷遊子は、ふと下を見、師にしがみついた。

足元がなかった。飛んでいるのだ。いや、正確には跳ねていると言つべきか——宙へ舞い上がる速度

がどんどん落ちている。あと少しで、落下に転じる
 だろうことは、まだ少年の雷遊子にも明らかだった。

「うん…下までほぼ二里^(四)、かな」

「お、落ちたら…」

「もちろん、おだぶつだ」

あくまでも平静な声が、かえって恐ろしく感じる。
 そして、落后感が上昇感にとって替わった。雷遊子が
 悲鳴を上げる。麗鈴は表情こそ変えていないが、師
 の腕を掴む手に力が加わった。

「心配しなくても、これがあるさ」

妙漣が右手にしっかりと握り締めているのは、例の
 盤印。

「で、でも妙老師、それは偽物じゃありません？」

「呪具も『盤印』くらいになるとな、そう簡単に使
 えちゃ困るんだよ。ちゃんとした使い方を知らなけ
 りゃ、こいつはただの円盤さ」

「いいから、止めるんでしょ、早く！地面についちゃ
 うよ!!」

雷遊子の引きつった叫びに、師は

「わかったわかった」

と、印を左手に持ちかえると、胸の前に置く。

「よく見てるよ。いいか、これがこの印の第一の力。
 私知知っている唯一^{ゆい}の使い方——封じた術を開放す
 る力だ」

雷遊子を抱えていた腕をはなし、印をしっかりと
 握ると、右手の指をそれに添え、目をつむる。

その格好を普通の人が見ても、ただ寝ているとし
 か思えないだろう。しかし、師に抱きついている二
 人にははつきりと見えた。印から発した『光』が、師
 の体をくまなく包み込んでいくのが…

「よし！」

かけ声と共に印を懐にしまいこみ、型を作り、ぶ
 つぶつとなにやら唱えはじめる。

「…天地分かれて後、天より落ちて地に至るは順法な
 り。地より天へ向かうはこれ反法なり。地より天へ
 向かいて法に反せざるもの、すなわち昇竜^{しやうりゆう}を置い

てなし。されば我、いま一度その力を拝借せん……」

型を決め、力を手に集める。すでに落ちる速度は、顔にあたる風が息苦しいまでになっていた。真下に見える緑のしみが森へ、蒼い筋が川へと変わってゆく。

「二人とも、しっかり掴まっているよ……昇・竜・界!!」

吐き出すような言葉と共に、両手のひらを真下に衝き下ろした。……と、ものすごい衝撃と共に、墜ちる速さが遅くなって行く! 三人の墜ち方はだんだんゆっくりになって行き……ついには空中で止まってしまった。高さは、地上から一丈あまり。

「降りるぞ!」

妙漣は言いざま、術を解いた。三人とも、そのまま一丈下へどすんと落ちる。

「いたたた……妙老師、もつとましな降り方はないんですか?」

妙漣は一言

「死ぬよりやましだろ」と、悪びれたふうもない。「あのひと、いなくなつたね」

雷遊子の言葉に二人が振り返ると、たしかにそこにはたしかに誰もない。気配すらも消えている。

「印が落ちるのを、待ちかまえているかと思つたのに……?」

師はぱたぱたと、服の袂を払いながら言つ。

「たしかにわからん奴だな。しかし……」

懐の盤印を確かめるように右手で握つて、一言。

「厄介な魚が喰らいついちまつたなあ……」

げっそりとした表情の妙漣を見て、弟子達が笑つ。

しかし、この表現がどれほどの確であるか、言つた妙漣でさえ気付いてはいなかった。

十二

河原を見渡せる、ちよつとした丘。

わずかに下草がはえた程度の、固い地面の上で、一

人の男が妙連たちのことを眺めていた。寝そべるようにしているのは、おそらく下から見つけられないためであろう。河原の師弟を見張っているのは、誰が見ても明らかである。

宙に吹き飛ばされた彼らが、無事に降りるのを見届けたのち、彼は立ち上がった。

「やれやれ、驚かしてくれるよ、まったく」

身体中についた、土ほこりやら草やらをばっばと払い落としながら、誰かに話し掛けるかのように、彼は言いつづける。

「『八方界』に『圧石』か。あんな素人しろうとに毛のはえたような奴だからよかつたが…あの黒服が持っていたらと思うとゾツとする。

しかし、あれほどの術師までもが盤印狙ってくるのか…これは、ちと宣伝しすぎたかもしれない……」

なおもぶつぶつと独り言を言い続ける彼——泉碓の足取りは、いやになるほど重かつた。

むかしのはなしである。

注

三 七尺…当時の一尺は約30cm

四 二里…一里は千八百尺。約540m

第三回 南岳の魔人

—

むかしのはなしである。

今で言うなら中国のやや西部。鬱蒼とした森の中。

鳥もかよわぬ木々の枝の中に、忽然と影が現れた。それも一つではなく…後からぼつり、ぼつりと、まるで墨を滴らしたかのような影が三つ。わずかな木もれ日にふと照らされて、見えるその正体は——なんと人間であった。三人は、何かに投げ飛ばされたかのように、仰向けのまま落ちて行く。

しかし幸いにも、厚い枝の壁に守られて、地面に叩きつけられはしなかった。

「あたたたッ」

最初に落ちてきた男は、左の肩口に受けた強い痛みで悲鳴を上げながらもぼつと跳ね起き、左手を妙

な形にきめる。目は後から来る二人を見据えながら期を見計らい、懐から素早く丸い印を取り出すと、これを右手に持ち、掛け声一閃、

「湯風界！」

と、一陣の強風が彼の背後から吹き、前方からこちらへ落ちてくる二人をゆつくりと受け止めた。

もちろん、普通の人間にこんなことができるはずがない。彼らは、術師であった。

男は、二人が無事に降りたことを見極めると、手を解いて駆け寄った。

「麗鈴、雷…大丈夫か、ふたりとも」

声をかけられたのは、年の頃なら十六・七の少女と、さらに幼い少年である。

「ええ、平気です。…すみません、妙老師」

先に口を開いたのは、やはり年上の少女の方だった。やや茶のかかった白の一枚服。飾りの少ない、全体的にさっぱりとした衣装が、ほっそりとした体に

よく似合っている。お嬢様のおしのびのびのようにも見えなくはないが、裾からわずかに見える胡服と、あくまで動き易く作られた靴が、それをきつぱりと否定している。

少女は三人の中では唯一『風』に乗れる術師。今度も二人をつれて『風』で一氣に目的地へ…と思つた途端、何かに弾かれて、ここまで吹き飛ばされてしまつたのである。

「しかたないさ。『反風』を使える奴がまだいるなんて、考えもしなかつたからな」

妙、と呼ばれた男。齡は三十を少し越えたくらいだろうが、くすんで茶とも緑ともつかない色の袷に、薄茶の帯。といったもヨレてはおらず、いかにも旅慣れた風情。

「いまの、『反風』って言うの？」

痛みを散らすように頭を振りながら、少年が尋ねる。こちらは濃い青の短衣の上に、ややうすめの青の衣をまとつた姿。四尺そこそこの背丈とあいま

で、自立たぬように作られている、といった風体。

「ああ、『風』に乗つて来ようとする者を追い返す術だ。しかし…こりやどうやら、俺たちにだけ効くようにしてあるようだな…」

「え？」 きよとんと見つめる少女の目を見返しなから、

「要するに、『盤印』の使い方を聞きたければ、歩いて来い』って言うんだろ。多分、印さえ持っていなければ、『風』で行けるはずだ」

ふうん、とうなずきながらも、聞き手の二人の顔が曇る。無理もない。なにせ手元の地図によれば、目的地までまだ千里はあるのだから…

二

術師、といっても色々々である。彼らは衝派は源流の術師。西の果て緑宝寺を拠点に、『光』もしくは『光雷』と呼ばれる命のちからを使った様々な術を用

い、この世に災いをもたらす空魔を退治すべく、日夜呪法を磨く者たち——とでも言えば格好もつくだろつが、実は単に空魔の氣に弱い人間たちが、身を守るためにより集まっただけの、ただの自衛集団にすぎない。

森に落ちて来た三人の術師——妙漣、麗鈴、雷遊子もつとも、雷遊子だけは術師見習だが——は、緑宝寺の命により、旅をしている。子供の手にもおさまるほどの小さな円盤『盤印』の使い方を聞くために、『北岩の術師』の許へ向かっているのである。

三

闇の中に声がした。

『妙兄貴、行ってください!』

—— ややかすれた、野太い声。

『ここはアタシが食い止めます!』

—— よく通るが上擦ってはいない、女性の声。

『早く! 妙兄貴!』

—— 力強く、頼もしい声。

『妙の兄者、あとを頼みますよ』

—— 静かな、あくまで静かな決意の声。

『このまま術を——こいつと心中なら本望です!!』

—— 言葉のわりに、なんとなく笑ったような声。

『妙兄貴!』

『妙兄さん!』

『妙兄貴!』

『兄者!』……

「うあぁッ!」

がば、と跳ね起きてから手で額を拭った。妙漣の手から流れ落ちる汗が、天幕の隙間からもれるわずかな光の中で、滝のように光っている。

光は月光、夜中である。そう、風から放り出されて、やむなくそのまま野営に入ったのだった。

(また、か)

思い出、というにはあまりにもつらい記憶。一生消えることのない……いや、消すつもりもない。己おのれの命は、あの五人のと引き替えにあるのだから……

天幕の外に目をやった。夕食の残り火が、まだ微かに残ってる。その中心から煙が細く、糸のように天へとのびて行く。糸を伝って天へ登り、彼らに会いに行きたいものだ。など取りとめもなく考えてもみる。

それでも自分はごまかせない。

もう会えない。ただ己の胸の中にのみある五つの顔、五つの声。忘れてはならない。他に知るものは誰もいないのだから……

孤独である。まわりに弟子はいても、語り合えない。仲間はいても、思いを同じにはできない。

「いや、一人いたか」

思わず口に出してつぶやいた。弟子たちは隣で寝息を立てている。聞かれる気遣いはない。

もう一人、すなわち我が老師、香こう鴻こうれん漣。捨てられていた六人の子供を、術師に育て上げた恩人。五人の弟子たちの死を、最も悲しんでいるはずの人物。

「そう言えば、お会いしていいいな」

会いたい、と思ったこともあった。しかし、いまさら顔向けできない、という意識の方が強い。鴻漣は衝派師範を退しりぞいて北の地に隠居している。強しいて会おうとしなければ、会えるものではない。

考えながら、ふと目が弟子たちをとらえた。

『ろうち、ろうち……』

まだ幼い頃の麗鈴の顔が、そこにだぶる。十二年前、まだ四つか五つのこの子を育てていたころ。あのころが一番幸せだったのかも知れない。私にとっても、彼女にとっても、そして死んで行った彼らにとっても。たとえ翌日には空魔との戦いに斃たおれるとしても、その瞬間まで笑っていられるだろう。そう言い切れるだけの、充実した何か、そこにはあった。

奴が現れるまでは。

奴、あだ名は『南岳の魔人』。気取った名だが、この方がましだ。奴の名前など聞きたくもない。今でも、思い出すと寒気が走る。奴が為したこと。為そうとしたこと。術師として……いや、人としてやってはならない数々のこと。それを止めるために彼らは動いた。

そして、死んでいった。

(どうどう巡りだ) そう感じても、自分を責めずにはいられないのである。どうやら、また眠れない夜を過ごすことになりそうだ。

四

そのとき、妙漣はおかしな殺気があたり一面にこもるのを感じた。

「いかん、起きろ雷、麗鈴！」

僅かの時間でも油断をした自分を責めながら、弟

子たちを天幕の外に跳ね飛ばす。そうしている間に、先ほどの殺気の源へ『光』が集中しはじめた。

「結果だ！ 急げ！」

少女はさすがに師範資格を持つ術師だけあって、師の言葉に即、反応した。少年は寝起きの目をぎゅつとこすって……いきなり胸に重い痛みが走ったかと思うと、数丈ほど吹き飛ばされてしまった。

「雷！」

弟子を追おうとした妙漣もまた、唇に痛めた左の肩口へ、重い一撃を受けてしまつた。

「妙老師！ 雷ちゃん！」

「結果を解くな!!」

左腕をだらんとたらしながら、妙漣が叫ぶ。右手で弟子を助け起こしつつ、目は術のもとを追っている。

(何者だ……?)

相手が誰であるうと、危害を加えてくることに変わりはない。

(狙いは、当然…)

懐に入れた右手を、ぎゅっと握り締める。その中には、手の平に収まるほどの、皮でできた印。

封じられた術を解き放つ力を持つ『盤印』。使いたいののは山々だが、たとえ封を解いたとしても、片腕はけがで動かず、もう片腕は印で塞がっているのは術が使えない。

「雷、お前の結界で、この場をもたせるんだ。その間になんとかする！」

少年はぐっ、とうなずいて手を交差させた。こうん、っといいう低い音があたりを圧する。何らかの術が、雷遊子の結界に弾かれたのだ。

「なんてえ術だ！」

雷遊子の『殻』結界は、源流の中でも十指に入るほどの強力無比なもの。それを突き破りかねない術など、そう多くあるわけではない。

(だが…この術は前に受けたことがあるぞ。そう、ずっと前に…)

記憶をたどり、はっ、となにか思い浮かんだ瞬間。

再び響いた、ごうん、という音に思いががき消されてしまふ。

「きゃ…」

悲鳴の先を見る。麗鈴も結界を張るだけで精一杯の様子。

形勢有利と見たか、相手が姿を表した。まだ二十歳前と見える男が四人、各々うすい青白色の戦袍に身を包み、手におのおの違つ形の字印を携えて歩み寄ってきた。字印にはめ込まれた小さな寶石が、月の光にきらきらと輝いている。

(あれも見覚えがある。ずっと前、まだあちこち戦い歩いていた頃に…)

はっ、として頭を振る。物思いにふけっている場合ではないのは明らかである。さっきの夢が、まだ彼を蝕んでいるのだらう。

…と言つて、策があるわけではない。じりじりと迫り寄る相手に対し、睨み付けることしかできない

とは、なんと情けないことか！

しかし、いかな悪夢と言えども、数多くの実戦の中で磨かれた、彼の胆力まで奪つことはできなかった。妙連は襟を引きちぎって紐にすると、懐から取り出した盤印を左手に押し込み、腕ごと体に縛りつけた。

(腕を折ってでも…この子らを！)

その時だった。

「やめて下さいな、湯法の方々」

男たちはぎくりとして声の方を見た。妙連もぎよつとして見た。そこにいた術師たちの誰一人として、声がかかるまでその気配に気がつかなかったのだ。戦いの最中とはいえ、これは異常と言っている。術師見習の雷遊子までもが、緊張して声の先を見つめた。そこにいたのは、茅の編み笠を軽くかぶった一人の若者。薄暗い中でも、にこやかな表情だけはわかる顔。だが…なんとも言えない威圧感を持っている。

「ひ、ひっこんでろ！」

男たちの一人が、圧迫感を振り払うように叫ぶ。若者はなおもにこやかに、

「そういうわけにもいきませんでして。『湯法』をこんなところで使われては、だまっておれませんからな」

言うなり、だらんとさげていた右の手を、ついと前に振り上げる。と、なにやら白い波のようなものが、手の先から男たちへ向けて放たれた。

「な…！」

言葉を発する間すらない。男たちは壁のようなものを作ろうとはしたが、それより早く、白い波に体のまわりを包み込まれた。

一人、二人…ついに全員が波に捕まったとき、敗北を悟った男たちの長が、怒りの視線で合図した。

「無念…くらえ！」

複雑な手の動きと共に、四人の体が火の球と化し、まばゆいばかりに大きく膨らんで…急に縮んでしまった。彼らが死を賭して放った術も、白い波に阻まれ

たのである。

「ああ、かわいそうに」

若者がぼつりと言う——あくまで笑顔のまま。

妙漣らは、まさにあつげに取られていた。雷遊子などは、結界を張ることすら忘れて、火の玉が消えるのをぼつと見ていた。この点、啞然としながらも結界を張りつづけた麗鈴は、やはり師範資格を持つだけのことはあると言えよう。

火の玉が消えるのを見て取り、踵をかえしてこちらに近づくと若者の顔が、月光に照らされてはつきりと見える。その瞬間、妙漣は慄然とした。

「あいつは！そんなばかな!!」

……だがあの術は漣術の『玉漣碎』だ……あれを使える奴はあいつしかいない。し、しかし……」

五

「すいー」

雷遊子が目をぱちくりしながら若者に近寄ってきた。若者はいかかわらず笑いながらも、ちよつと照れたように、

「いや、僕のはそんなたいしたもんじやないよ。妙兄貴に比べたら、チリみたいなもんさ」

「妙老師を御存知なのですか？」

いつのまにかそばに来ていた麗鈴が、服をばたばたと叩きながら尋ねる。

「あれ、きみは妙兄貴の弟子の女の子かい？……ずいぶん大きくなったねえ！」

麗鈴は、おや、という顔つきで若者を見据える。若者の笑みが大きくなって、

「ああそうか、妙兄貴はあのころまだ総師範役だったから、僕らのことは紹介してなかったつけね。僕は妙兄貴の弟子さ。」

六漣呪って聞いたことあるだろ？ 妙兄貴はその一番上、鴻一星の妙漣。僕は一番下の鴻六星、洪漣っていうんだ」

この言葉に妙漣が跳ね起きた。洪漣の目をじつと睨みすえたままじりじりと近付き、ふつと肩を掴んで一言。

「何者だ」

その声からは、かすかに怯えに似たものが感じられた。

「いやだなあ、妙兄貴。もつ忘れたんですか？」

笑みを絶やさないう洪漣。肩をつかむ腕に力が入っても、その顔は崩れない。

「その顔であの術を使う洪漣という奴なら知っていない。たしかにな。しかし、あいつはもうこの世にはいない。十一年前に、私が殺した——」

つと伏せた顔をがばと上げ、再び若者を睨んで、もう一度聞く。お前は何者だ。なぜ六漣呪のことを知っている!？」

「かないませんねえ」

若者は少しも動じない。顔の微笑みは、薄れる気配すらない。

「正直に言えば、妙兄貴の言うとおりです。僕は兄貴の知ってる洪漣じゃないんですよ。死にしまった洪漣の兄です。」

先日鴻漣老師から、弟と同じ呪名を賜りましてね。いうなれば二代目の鴻六星ってわけですね」

六

夜も遅い。子供たちはむりやり寝かされた。

と言つて、その好奇心がなくなるわけもない。

「ねえ、李姐。六漣呪ってなんなの？」

聞かれたのは麗鈴。緑宝寺では雷遊子と姉弟のように過ごしていたもので、今でも呪名でなく本名の「李」で呼ばれている。

「あたしも名前しか聞いたことないけど……なんでも、ずっと前に総師範を務めていた術師が、六人の弟子をみんな漣術師範に育て上げたことがあるんですって。それが六漣呪。六人揃つと、普通じゃ考えられ

ない術を使うことが出来るとか聞いたわ。聞いたときには、まさか妙老師もそうだとは思わなかったわね。『連術』だから不思議じゃないけど

まあ、これは泉老師から聞いた話だから、どこまで本当かわからないわね」

「いや、あつてるよ」

二人が起き上がると、そこには妙連が立っていた。

麗鈴はばつの悪そうな顔で

「お、おいででしたの」

「まあ別にいい。いきなりこんな話を聞いて、興味を持つなと言う方が無理だろう」

言いながら二人の近くであぐらをかく。

「ついでに言おうか？」

六連呪は各々が特殊な術を持っている。普通の術師にはまずできないような術をな。なぜできるのかは聞くなよ。私も知らないんだ。隠居された鴻連老師なら、わかるかもしれないが…

私は封じたから目立たないが、洪のはすぐ分かる

だろ…あの笑顔さ」

「へえ…」

「さっきの連中も、やつ笑顔にやられたと言っている。あの顔で敵を惑わせ、戦況を自分の思い通りに操るのがやつ得意技だ。ついたあだ名が『笑面竜』しょうめんりゅう見かけよりずつとおっかないんだぞ。

さ、気がすんだらもう寝ろ」

子供たちの天幕から立ち去る妙連の背に、「妙老師」と声がかかった。師が足を止めて振り返ると、寝巻ねまき姿の麗鈴が、足早にやって来る。

「一つだけ、教えてください。妙老師」

妙に固い調子の麗鈴に首を傾ななげながらも、師は言葉をつながした。

「十一年前に、私を泉老師の許へ預けて隠居なされたのも、六連呪が原因だという噂がありました…：…本当ですか？」

妙連はふつと寂しげに笑うと、弟子の額を人差し

指でつんつ、とつついた。いきなりだったので、体制を崩した麗鈴はその場に座り込んでしまう。

「子供は、寝なさい」

妙漣はそう言い残すと、焚き火の方へと歩み去っていった。

(いかないでろ、うち、いつちや、やああ!!)

心の中、幼いころの自分が叫ぶ。突然、傷だらけで帰って来た師に、いきなり泉碓の許へ連れていかれた、あのとき。頑がんとして来ることを拒むその背中。泉碓に押さえられた肩の感覚。すべて、覚えている。いまでも、はつきりと思い出せる。

泉老師が言っていた。妙老師は死ぬより辛い目にあつたのだ、と。大人になれば、わかる日も来るだろう、と。

「大きくなっても…教えてくれないのね、あたしには。なあんにも——」

とぼとぼと、天幕に戻る麗鈴。その頬は、月の光

に輝いていた。

七

「しかし、洪漣の記憶まで持っているとは、驚きだな」
弟子たちを寝かしつけて、一息ついた妙漣。いまは焚火たきび越しに洪漣と向い合っている。

「はは。私たち兄弟は、ちよつと変わっていますからな。」

ふたりとも鴻漣老師に拾われたものの、私は術師としてさほどの才覚がなかったので、最低限の術だけ学んでから外で生活くらしていたんですよ。

弟が死んで、記憶だけでなく術や性質まで受け継ぐなんて、思ってもみませんでした……」

妙漣はうなずいた。術師の…空魔に脅かされてはいるが、日々の食事には困らない生活を見たあとで、外でのくらしは決して楽なことではない。それがいきなり術師に戻ってしまったのである。その驚きは

いかばかりか——

「ところで妙兄貴、あの男の子は見たことありませんけど……？」

話題を変えたがっている様子に、妙漣は少しがっかりした。もつと話しを聞きたいところだったが、いろいろ言いにくいこともあるつ、とあきらめる。

「洪漣の記憶しかないのなら知らんでもしかたがないが……名は雷遊子。七年前、空諾どのが緑宝寺の森の中で拾った子供だ」

「あ、それじゃあ、『雷天人』の……」

「しっ……」

妙漣が思わず弟弟子の口を押さえつけた。

「余計なことだけは知っているんだな」

わざと苦い表情を作る。洪漣、笑いながらもさすがに気まずい顔で、

「……じゃ、まだ何も？」

「言うべきことじゃない。何も起こらなければ、知らなくてもいいことだ」

洪漣は笑顔を変えずにうなずいて、

「師匠らしくなりましたね、妙兄貴」

兄弟子はぶい、と横を向く。風が木々と共にその顔をなぶる。その行く先を、見るともなく追いながら、妙漣はぼつり、ぼつりと言葉を出していった。

「六漣呪はもう還つてこない。洪漣はお前が替わりにいるとしても、あとの四人はもう得られない。すべては私のあやまちだ。奴と対峙する前に、鴻老師の許を訪ねていれば……」

少なくとも、あやまちを繰り返してはいけない。あの子らを、五人と同じ目に合わせるわけにはいかなんだ。

あの子らを一人前の術師に育てる。実のところ、私の今の生きる支えは、それだけなんだよ」

洪漣は笑顔のまましんみりと聞いていたが、兄弟子の言葉が途切れるのを待って、静かに口を開いた。

「お話には、二つばかり間違いがありますね。まず一つ。六漣呪はみんな生きています。もちろん、弟

を除いてですが」

妙漣の目が、かっと見開かれる。が、洪はそれにかまわず

「そして二つ目。大変残念なことです——

我らが宿敵、渴磨鵬螺は……いまだ、生きています!!」

妙漣は頭に大岩をくらったように感じた。『渴磨鵬螺が生きている』その言葉だけが頭の中を駆けめぐり、感覚も思考もすべてがなくなってしまう。

肩を揺ゆすられる感覚にふと正気にかえった妙漣が、弟子を、逆に強く揺すり返した。

「そ、それこそ間違いないのか!? あのと、奴は俺が『爆ばく天てん界かい』でたしかに葬まうつた! 奴をおさえつけた洪漣ごと、あそこにあつた人も、ものも、すべて打ち砕いたはずだ!

——もし、奴が生きているとしたら……洪漣の死は、あいつを死なせちまった俺は、いったい……!」

と、そこまで一息で言つて、はっとした。弟子の目を見て

「……す、すまなかつた。こんなことは、お前の方がよほど感じているんだよな。思わず、我を忘れてしまった……まだ修業が足りないな」

洪漣は、うなだれる兄弟子を横目にして、満足げに何度もうなずいた。

(そう、これでこそ鴻一星の妙漣だ。弟が心酔した、衝派最大の術師だ……)

妙漣の方は、下を向きながら拳こぶしを握り締め、意志を噛みしめるように、少しづつ言葉にしていった。

「奴は……奴だけは、私が倒さねばならん。お前の話だと、六漣呪は揃そろつな。それなら、なんとかなる。何があんでも、六漣呪を集めて、六人の力で奴を討うつ。他に奴をたおすべは……ない!」

自分に言い聞かせるようにそう言つと、ぐつ、と向き直つて、

「洪漣、手伝つてくれるか?」

弟弟子の笑顔が、本当に心からのものと、他人にもはつきり分かるほどになった。

「弟が死んで、その記憶と技を得てしまっても、私は術師になるつもりなんかありませんでしたよ。」

奴が生きていると知ってから、老師の許で修業を重ねて術師になったのです。すべては奴を滅ぼし、弟の無念を晴らすために――」

言い終わらないうちに、兄弟子に抱きつくように擦り寄り、首に手をすつ、と回す。そのまま手を懐へ滑らせると、なにやら薄い板を取り出した。黒く滑らかな六角の板。各頂点にひとつづつ違う色の石が埋めこまれ、中央には「漣」の一字と、それに巻き付くかのような竜が浮き彫りにされている。

洪漣は、板の上に指を二本乗せ、祈るような表情でつぶやきはじめる。

「我、鴻六星洪漣。弟に成り代わり、六漣の縛を解くものなり」

つぶやきが終わると同時に、きんつ、という鋭い

音。そして六角板の石の一つが弾け飛んだ。

「もちろん、お手伝いいたします。こんどこそ、奴の持つひとかけらの光雷までも、この世から消し去りましょう！」

八

こちらは衝派の拠点、緑宝寺。

静かな寺の中ほどに、ふわり、と漂うように空気のゆらぎが生じた。夜の庭をのんびりと眺めていた一人の老人が、それを見つけて近寄り、つい、と手を差し延べる。するとゆらぎはその手にまとわりつき、老人の体を震わせて音に変えていった。

これぞ衝派自慢の連絡法『風文呪』。

老人は一通り聞き取ると、懐から何も書いていない竹筒を取りだし、墨をつけた筆でささつとしたためて、受取人の許へ届けに行く。本日の受取人は、この寺の長。緑宝寺空諾であつた。

「おや、妙連どのだ」

中堂の奥、緑宝寺の居室で、竹簡を読む空諾。心
なしか声はずんでいる。

「妙連、といいますが、かの光雷帝こうらいていですか？」

その目の前で茶を飲んでいるのは、もと透形師とうけいしの
成阿せいあ。透形師というのは、衝派術師たちの仇敵。空
魔の出現時期、出現場所を見透す役割である。い
まはもう隠退しているが、緑宝寺の長老と言える人
物であり、緑宝寺をひたすら影で支えている。

「さすがに良く御存知で。ま、本人は何も言いませ
んが、あちこちで言われているようですな。

さて…ふむ。渴磨が…」

「渴磨鵬螺！まさか…！」

空諾がにやり、と笑って、

「衝派術師に『まさか』は禁句。そうおっしゃった
のは成阿どののほずですよ。

——渴磨退治に行かせてくれ、と言うことよろ
うですが、どうしたものでしょうねえ」

顔中のしわをさらに深くして、成阿は考え込んだ。

「渴磨となると、あやつは目が見えなくなるから
なあ…」

この際、行かせてやっていいのではないかな。盤
印のことは他の者でも間に合うのだろう？」

緑宝寺はちよつと頭を掻く。成阿がじろりと目を
やった。空諾の昔からの癖で、隠し事を指摘される
と、いつもこのように頭を掻くのである。

「ええ、用件そのものは誰でも構わないですが…実
は印にちよつと細工をしましてね。それを解かない
と…その…いつ、どの流派から攻撃をくらうか、わ
からないのですよ」

「なるほど…」成阿の額に、薄く青い筋がいくつ
も浮き出てきた。

「罫あとにしたらわけですな。この時期に！最も貴重な
人材を!!」

成阿とは、空諾が緑宝寺にやってきたときからの
つき合いになる。一流派の長となつてからも、彼に

だけは頭が上がらない。

「いえ、もともとは雷遊子を鍛えるために仕掛けたんですよ。『育てるには実戦が最もいい』というの
は、私自身の経験からとも言えますし——しかしまさか、このようなことになるとは……」

「『まさか』は禁句だと言いましたぞ……まあよろしい。とにかく、応援を少し出さぬことには」

空諾はほつと、安堵のため息をついて言った。

「それについては適任の方がいます。では、その方の準備ができ次第、妙漣どのには渴磨退治に専念してもらいましょうか」

九

翌朝。

子供連れでもあるから、妙漣は意識して朝早くから行動することにしてた。懐かしい顔に会った翌日でも、その原則は曲げられない。……とはいえ、中

途半端な時間に起こされた子供たちは、なかなか起きられない。妙漣はやむなく、弟弟子とともに身体をほぐしていた。

「で、やっぱり北へ向かうんですか」

洪漣が笑いながら言う。

「『北岩の術師』とやらに、盤印の使い方を聞かねばならないんだ。緑宝寺の返事が来るまでは、渴磨退治には出かけられないよ」

妙漣も、仕方なさそうな口ぶりである。

「それに……あの子たちは、巻き込むべきじゃない。これは、六連呪の問題だからな」

弟弟子の笑顔が、苦笑に変わった。

「無駄ですよ。なにがあってもついて来るでしょう」

——あなたの弟子なんですから」

妙漣は、ため息をつくしかなかった。

弟子たちの仕度しどを待つて、四人が歩きはじめる頃には、もう日も高く上がっていた。森が途切れて、目

の前に草原が広がる。岩と砂と森しか見たことのない雷遊子が、わあ、と声を上げた。

「今のうちに感激しておけよ。そのうち飽きることになるからな」

あら、と麗鈴が師の顔を見た。幼い日、本当の師弟として過ごしたころに戻ったよつな表情をしている。

(楽しそうね)と思わず微笑んだ。

「おや？ いま何か光ったみたいだけど……？」

洪漣が指をさす。その先には、たしかにきらりと輝くなにかが見える。

「昨日の今日だ。注意しよう」

言いながら盤印を取り出す妙漣。だが、昨日と違って目がギラついていない。光は渦のように広がってそしてまた縮まっていった。そのあとに、なにやら人影のようなものが現れる。

昨夜と同じ姿の男たちと、同じような服を着た大柄な女性。それを見たたん、妙漣と弟弟子の動きが止まった。

「ま、まさか……！」妙漣の声が震えた。

「そうれん 匠漣の姐さん!?」洪漣の顔から、笑みが薄れた。

じりつ、とにじり寄るつとする湯法の男たちの目前で両手をひろげ、制した女性が口を開く。

「我は湯法、湯磨鵬螺どのの配下でこう 匠漣。命により責様らを……」

両手をぐい、と体に押し付け「光」を溜める。

兄弟弟子は各々素早く型をきめる。敵対するつもりはないのだが、体が勝手に動くのだ。術師同士の戦いになれた彼らの、悲しい性分である。

術を振るうわけにもいかず、さりとて防戦もできない——相手が手加減なしでかかってきたら、相当の結界術でも長くは持たない。それは共に戦ってきた二人が、一番よく知っていた。

迷いながらも子供たちを背中隠して衝撃を待つ。

だが、匠漣はやおらくるりと向きを変えた。

「助けに来たよっ！」

ぶわっ、と音がしそうな勢いで『光』を放つ。単純で

「威力は低いが、それだけに避けにくい術、『しょうくわんじゆ照光呪』である。

「そんな…ば、ばかな！お前の心はずべて奪つたはずなのに!？」

決して凄まじい術と言つわけではない。しかし湯法の男たちにとつて、あり得ないことにたいする衝撃は大きかつたらしい。一人たりと、起き上がる者はいなかった。

「ずいぶんとナメたまねしておくれだね！この活布神かつぶじんがそう簡単にやられるとでも思ったかい？これからたあつぷり後悔させてやるから、覚悟をしつ!!」

右手を開いて高く空に上げ、おもむるに宙を掴むと、それをびゅん、と振り回す。何も無いはずの手から、白いものが帯となつてあふれ出てきた。

「なんだ、ありや」

予想外の展開にとまどう湯法の術師たち。そこへ向けて、白い帯がするすると伸びる。布である。宙

から湧わき出した布が、見る間に彼らを縛しばり上げてしまつ。

「妙兄さん、あとお願いね」

すつかり縛つてしまつてから、匠漣が言つ。

「『たあつぷり後悔させる』んじゃないのかい?」

妙漣はすでに型を解いて、にこやかに微笑んでいる。

「こんな簡単に捕まるやつら、相手にしたんじゃ、活布神の名がすたりますよね」

洪連の軽やかな声がする。顔は笑っているが、手は構えを解いていない。軽く頷く妙漣、つかつかと布ダルマに近寄ると、荷物の中から小さな刃物を取り出して、足の部分の布を切る。

「いまは機嫌がいいからな。さ、どこへなりと消えろ」
布ダルマはこけつまろびつ、森の方へと消えて行つた。

雷遊子と麗鈴が、おずおずと近付いてきた。

「おばちゃん…あ、ごめん！お姉ちゃん…は、誰なの？」

「匠漣は片手でひよい、と少年を引き寄せると、その背中をぼんぼんと叩いた。雷遊子は思わず咳が出るほどむせる。加減している、とはわかるのだが、少年にとつては強烈な張り手であった。」

「子供が氣い使うんじゃないよ。妙兄さんが言ったんならケ飛ばすとこだけど、あんたから見りゃ、あたしや確かにおばさんだね。」

「あたしは鴻の三星で匠漣。あだ名は活布神で、六漣呪の中じゃただ一人の女術師さ」

「女坊にいた頃は、私の世話もしてくれたのよ」
麗鈴が言つ。

「はっはあ。へっつにあんたあ、世話の焼ける子じゃなかつたよ。」

「じゃ…妙兄さん。そろそろ行きましようか」

「その言葉に、妙漣。しばらく、何のことやらわからない。が、ふとひらめくように前後がつながった。」

「おまえ、奴の居場所を知っているのか？」

「ええ。ダテに十年もバカの振りしてたわけじゃないわ」

「ちよつと遠いけど、みんなも待つてることだし、さうさど行きましょー！」

「悠然とうなずく匠漣が、兄弟子の手を引つ張るようにした、ちよつどそのとき。」

『それには及ばぬ』

「聞いたことのある重苦しい声。三人の術師が、ぱつと身構える。そこには、いつのまにやら、先ほどと同じ光の渦ができていた。」

「…渴磨！」

「出たな渴磨鵬螺！」

「憎悪と、わずかの恐怖がありありとうかがえる、三つの声。そんな声など気にも留めず、重い声が更に響く。」

『久しぶりだな、妙漣。』

「さあ、十一年前の続きをやるうじやないか。その

渦を越えれば私はすぐだ。もっとも、無事に渦を抜
けられればな…ふふふつふあつはっはっはっ…』

哄笑が少しつつ薄れてゆく。渦は逆に大きく、大
きくなって、回りにあるものすべてを引きずり込ん
でいった。洪連、匝連はすでに渦の中に消えている。
消える前に、兄弟子へ目配せして。

妙漣はしばらく動けなかった。怒りと、責任との
狭間。一瞬の迷いがあった。

「老師！」

「妙老師、早く逃げて！」

二つの声に我に返った妙漣、見れば、弟子たちが
渦に捕まりかけている。

「い、いかん！」

言いが早いか、渦の中心へ向かって突進した。盤
印を懐深くにしまい込み、両手を手刀に構えて胸
の前に十字に交差。渾身の『内光』をただただ手の
先に集めてゆく。威力は大きいが触れねば効果のな
い剛流秘術『閃刀碎』である。

「二人とも、目をつむれ！」

渦の真ん中、弟子たちの間にくさびを打つように、
手刀をたたき込んだ！ぐおん、っという音と、血の
ようにあふれ出す光の中、人影が飛び込み、飛び出
した。

人影は、共に一つ。

飛び出た人影はくらくらする頭を振った。回りを
見ると景色が違う。しかもそこには自分しかない。

「老師！」雷遊子だった。

「くッ。ひとりだけ…か。すまん、麗鈴」

「構いません。妙老師と一緒できれば」そう言っ
てにこ、と笑う麗鈴。本当に嬉しそうである。

「困った奴だ…まあ仕方ない。このまま渴磨退治に
加わってもらうぞ」

そういう妙漣も、言葉ほど困った顔はしていない。

「老師い!!」

狂ったような叫び声を上げながら、雷遊子が駆け

込んでくる。

「来るな！」と言わざま、何かを投げつける妙漣
思わず受け取った雷、見て驚いた。

「盤印…」

「そうだ。これからはお前が一人で守れ。その使い
方がわかるか否かいなで、衝派の未来が決まる。

私の弟子ならば、見事に成し遂げて見せるんだ。い
いな！」

麗鈴が渦にのまれた。妙漣ももはや頭ぐらいしか
残っていない。もう間に合わない。泣こうがわめこ
うが。雷遊子にもそれがわかった。

「でも、どこへ行けば…」

「印が導いてくれる」

妙漣は落ち着いた口調で言った。渦はだんだん縮
まって行き、喋りしゃべつらくなっているのに。

「わたしにもやっとわかった。印の使い方を伝授し
てくださるのは、あの方以外にはない。

盤印を信じろ、雷！私を信じるなら、印も信じる

んだ——」

妙漣の頭が、渦に消えた。

見つめる雷遊子。だが、もう泣いてはいない。に
ぎりしめた印をふとはなして、宙にかかげる。自分
の光をそこに集めて、願った。

（老師の言うことが本当なら——いや、信じなきゃ。
盤印は、僕を北岩へ導いてくれる。きつと導いてく
れる。きつと…）

呪文のように、何度も何度もくりかえした。

もう何十回、唱えただろうか。背後に光を感じて
振り向いた。そこには、道があった。荒れた草原の
中に、たった一本。真まっ直すぐにのびた道が。雷遊子
はその道を歩きはじめた。

迷いは、なかった。

「た、たつ、大変です!」

ここは中堂。緑宝寺の中心に位置する、源流の心臓部である。その奥にある、小さな机の前では、二人の男が向い合つて茶をすすりあつていた。

男の一人、緑宝寺空諾は、駆け込んできた男を手で制して、

「そう焦らないで陶郭とうかく。まあ座つて、茶でも一杯飲んで——」

言いながら自分の口元にも茶碗を運ぶ。

「そんなことを言っている場合じゃありません! 妙総師そうし——いえ、妙漣せうれんどのが、きつ、消えてしまいました!!」

思わずむせる空諾。その正面に座つていた男

——鮑采ほうさいもぎよつと目をむく。

「『消えた』とは、どう言うことですね?」

陶郭は緑宝寺以外の人物がいるのに気付き、やや

あらたまつて言った。

「や、これは失礼を……」

洛鮑采らくほうさいは衝派源流の術師ではない。が、数多くの流派の術を心得ながらも決して鼻にかけない彼は、緑宝寺にいるほとんどの術師たちに信頼されていた。もちろん、陶郭も例外ではない。

「なに、妙漣せうれんどのには万が一の場合に備えて、常に一人、術師を付けているんです。その方の報告によると、なにやら……その、光の……渦、のようなものが、皆を飲み込んでしまったとかで」

「全員? 雷遊子や、泉碓の弟子……麗鈴もか!」

「は、先に麗鈴と雷遊子が飲まれ、妙漣せうれんどのはかれらを救つために中に飛び込んだとのこと。その後は残念ながら、自分の身を守るのが精一杯だったと」

ふと空諾が顔を伏せた。しばらく腕組みをしてから、ぐいと体を起こす。

「『神足』の泉碓ほどの術師が、見届けきれずに逃げざるをえないとは——」

脇で聞いていた鮑采が、いきなり眼を見開いた。「妙漣に、泉碓ですと！かつての、衝派三頭竜のうち二人までもが!!」

軽く束ねただけの長い髪が、宙に踊る。その勢いに驚いた空諾と陶郭の顔を見て、鮑采は咳払いをすると椅子に深く腰掛けなおし、緑宝寺同様に腕を組んだ。

「……渴磨というやつは相当な使い手ですな」

空諾は苦い顔で、こぼれた茶を拭きながら

「ええ。ちょっと、甘く見過ぎていたようです。

しかし、あの妙漣どのが弟子を助けられないとは思えませんが——ほら、やはり離れていない」

どこから取り出したか、彼の手には、ちょうど収まるくらい白い玉。その中に緑の点が一つ、赤の点が一つ、寄り添うように光っている。

「どつやら、雷遊子に盤印を渡して逃がしたようですね」

ほう、と玉を覗きこむ鮑采。

「なるほど、さすがに噂通りの方だ。

しかし、先ほどの話しからすると、盤印を持つ雷くんとやらを、このままにしておくのは危険すぎますな。誰か——」

そこまで言いかけたとき、おもてでカタン、という音がした。耳を澄ますと、ぱたぱた、と小さな足音が遠ざかって行く。

「…子供のような?」

「きつと風くんでしょう」

空諾はそう言うと、こぼれずに残ったわずかな茶をすすった。

風遊子。雷遊子とは幼なじみで、同じ術師見習だが、『風』乗りとしてははるかに上。そして……思い立ったらまず手足が動くその性格。

「よろしいのですか?」と、これは陶郭。

緑宝寺は、とんつ、と勢いよく腕を置いて、いたずらっぽい目で鮑采を見る。

「よろしくない、と思うでしょう。あなたならね」

鮑采はあきらめ顔になった。

「はいはい。子供との二人旅も、ま、悪くはないですな」

脇に置いた杖をさっと取って部屋を立ち去るその姿は、しかし決して嫌そうではなかった。

むかしのはなしである

第四回 草原の術師

一

むかしのはなしである。

ここは今で言うなら中国の北西部。一面に広がる草原。騎馬の民を育んだ、果ての知れない草の野を、一人の少年が歩いてきた。

やわらかな青を基調とした、そのいでたちは、薄い緑の絨毯じゅうたんの上で目につきにくい。この姿になることを教えた人物は、おそらく相当旅慣れているのだろう。

少年の目は、手元の印をずっと追っている。

小さな円盤状の印。これが指し示す方向へ向け、少年は一步、また一步と歩いて行く。

草原とは、緑の砂漠である。

草はあっても食べられない。大地の上に水はない。今の季節に雨はない。少なくとも少年にとって、これでは砂漠と大差なかった。

事実、この数日と言うもの、彼が口にしたのは、水の少ない草だけである。食べた、わけではない。水欲しさについ口にした、というのが正しい。もっともその結果、ますます咽のどが乾いてしまったのだが。

少年の歩みが止まった。本人は、まだ歩いているつもりでいる。足が上がらない。前へ進めない。しかし本人はそれに気付かない。ただただ、印の示す先へ向けて、動こうとして…そのまま倒れてしまった。

少年は、まだそれに気付いていなかった。

二

「ちよつと休んで行くか、風くん」

深い森をようやく抜けた道はずれ。男と少年が並

んで歩いてきた。

男の方は、四十前くらいか。五尺そこそこ小柄な割にはがっしりとした体格。少し皺のある落ち着いた表情。ちらほらと白いものが混じる髪を、軽く束ねて後ろへ流している。灰色がかつた綿の着物に黒っぽい麻のはおり。足は長旅用のこしらえ。左手には、頭がずんぐりとした木の杖を持っている。と言つても、べつに杖を撞かねば歩けないという風ではない。

もう一人は、まだ十かそこらの少年。煤けてはいるが、もとは白かったとわかる旅衣を着て、なにやら球状ものが入っているような木綿の袋をぶる下げながら歩いている。

「雷くんの居場所を見てくれんか？」

風と呼ばれた少年は、男の声に目だけで応えた。腰に吊した木綿の袋から、半ば透きとおった玉を取り出し、手の平で温めるかのように持つ。しばらくすると、玉の中にぼつと点が浮かび出してくる。

「ええと…ぼくたちの場所が緑宝寺から東に…およそ五百里。雷のいるところまでは…うんと…北に行つた東の方。だいたい八百里…かな」

男は軽くうなづく。

「むむ。で、そつちの方に流れている『風』はあるかい？」

少年は今度は空を見上げて、目をつむつた。しばらく首を縦横に振り、時おり眉間にしわを寄せたりしていたが、やがて目を開けると、

「だめ。みんな逆方向だよ」と、あきらめ顔で答える。

「うむむ…しかたないな。高いところの『風』に乗れば何とかなるかも知れんが、きみにはまだ荷が重いし。もう少し歩かねばならんかな—ん、どうしたね？」

少年は、戸惑つたような瞳で男の顔を見ながら、玉を指さしていた。男は近付くと玉をのぞき込む。

「む。彼の『光』が、薄れていくな……」

眉一つ動かさない、普段通りの平然とした顔。だ

がここ数ヶ月、一緒に旅していた少年の耳には、その顔の奥で歯噛みする音が響いたように思えた。少年の額に汗が浮かぶ…暑くもないのに。

「『光』が薄れるって…」

「雷くんの身に、何かあったかな…ま、飯にしよう」
肩にかけた荷をおろそうとする男。わずかにその腕が震えている。少年の顔からは血の気が引いていった。素早く玉を袋に入れると、なにやら取り出そうとしていた男の手を引っ掴んで

「乗るよ、いちばん上の風に…」

男がなにか言おうと口を開いたが、声が出る前に二人の姿はそこから消えてしまった。

三

乾した草の匂いをかいで、少年はやつと足が動いていないことに気づいた。

いつの間にやら布団の中。頭の上には天幕の屋根。

がば、と跳ね起きた目の前に、小柄な人影が立っている。

「ダメヨ、ネテナキヤ」

女性である。薄い緑の衣に緑の胡服、腰までありそうな髪を三ツ編みにして、肩から前へ垂らしている。浅く焼けた顔には、そばかすの痕が少しだけ。「少女」と呼ぶには気恥ずかしい年頃だが、ただ「女」と呼ぶのはちよつともつたいたい。ま「娘」というのが妥当なところだろうか。

もつとも、見ている少年にとっては、そんな違いなど関係ない。歳上の女性は、みんな「おねえちゃん」か「おばちゃん」で済んでしまつたのだから。まして今の彼には、そんなことよりも重要な問題があった。きよとん、と見つめる目を見ていた娘が、ぼんと手を打って

「ソツカ、コトバガチガウノネ…エエト…」

この言葉、わかる？」

ぶんぶん、音が聞こえそうなくらいに、少年が頭

を振る。そのしぐさが妙に可愛らしかったので、娘は思わず微笑ほほえんでしまった。つられて少年も笑顔になる。和やかな雰囲気があたりに流れた。

娘は、湧き出る笑みを無理に抑えて、

「だめよ、草原をあまく見ちゃ。私たちだって、一人じゃ何日も過こせないんだから」

「ごめんなさい」

しゅんとする少年の顔を見て、娘はちよつと気の毒になった。

「べつに、謝らなくてもいいけど…どうして、こんなところ、一人で歩いてたの？」

「これが…」

少年は懐から印を取り出して、娘に見せる。その瞬間、娘の顔色が変わった。

「コレ…ナンナノ、コノモンショウウ!？」

言葉が変わっていることさえ気付いていない。それほど、勢い込んでいた。

少年は勢いに押されて、ただ目を白黒とするばかり

り。しばらくして、息を整えた娘が、天幕の入り口から振り返って言った。

「長おさに会ってくれない？」

その声は、あまりにも緊張していた。

四

天幕のおもてに出た。まわりには、大小さまざまな天幕が十四・五ほど建ち並び、その隙間に馬が放たれている。水を飲む馬、草を食はむ馬。砂漠も同じと思っていた草原が、急に生き生きとしたものに見える。

娘の発する緊張感さえなければ、少年はすぐにも馬たちの中に駆け込んで行っただろう。

「おうおう、珍しいことだな。こんなところまで漢人かんじんが来るとは」

真ん中の大きな天幕に入るや、中から大声が響い

た。椅子に座つていても天幕が小さく見える大男。

「『漢人』つて、ぼくのこと？」

少年は、この大声にも平然としている。

「そつだ、もちろん。漢の言葉を使うのは漢人に決まつておろつが。」

…で、チャムリ。何か用か？」

娘が少年のとなりに進み出た。

「ええ……この子が、面白いものを持っていたものですから…」

長は眉をしかめた。幼おほなな児このころから見ているが、思わせ振りの口など聞いたことがない。なにかあつたか、と考かんえながら、目つきが鋭くなる。

「さあ、さつきの印を見せてあげて」

妙な雰囲気を感じながら、少年は右手に持った印を前に差し出した。

子供の手の平にちょうど収まる、小さな丸い印。その表面には一匹の竜。その四方に赤青黒白の四石。その間を埋めるように「緑」「宝」「寺」「印」の四字。

これを見たとなん、長の様子が変わった。

「お前、これをどこで？」

「老師から預かつたんです。これを持って、『北岩の術師』に会いに行け、つて言われて」

長とチャムリが顔を見合させた。

「『北岩』つて、北の、岩のことよな」

期待に満ちた眼差しに、少年は戸惑つてしまった。

「そつだと思つけど…それが、どうかしたの？」

娘の顔が、ぱつと明るくなった。長はその顔に大きく頷くと、少年に向かつて言つた。

「この北に、大きな岩がある。その表面に彫られた模様が…その印とそっくりなんだ。」

その岩の中には、わしらの恩人がいてな。もう一度お会いしたいのだが…」

少年が長に飛びついた。娘が制止する間もない。

「そこまで連れて行つて！ぼくは、どうしてもその人に会わなくちゃいけないんだ!!」

その強い調子に、長でさえも気圧げおされた。なぜか

はわからないが、この子はわしら以上に、あの方を必要としているようだ…

長は少年の両肩をつかむと、大きくうなずいた。そして娘に言う。

「じゃあ、チャムリ。誰かあと一人連れてきてくれ。そう——できればフサンがいいな。

わしも行こう。馬も忘れずにな。人数分……と、お前の名は何と叫びたかな」

聞かれたのは少年である。

「雷遊子っていいです。雷で遊ぶ子。」

「はは、なかなか威勢のいい名前だな。わしはグン二という。」

それでは雷ヤン……言にくいな、雷と呼ばせてもらうぞ。雷、きみは馬には乗れるのか？」

雷は大きく横に首を振った。

「そうか。なら四頭だ、帰りはあの方にも乗っていただかねばならん」

嬉しさを押さえきれない様子のチャムリが、はい、

と一言残すと天幕から飛び出していった。

グン二はその後ろ姿を見送りながら、ふう、と息をもらす。姿が天幕から消えてもしばらくじつとそこを見ていたが、ふと気を取り直して振り返ると、雷遊子に向かって声をかけた。

「雷、きみは仕度したくができるまで、飯でも食っていないさい」

言われて天幕を出た少年。なんでこうなったんだろつ、と考えながら、さきほどまで寝ていた天幕へと戻っていった。

五

再び、天幕に入った雷遊子。また少しめまいを感じてしばらく横になっていると、チャムリが何か手に持って入って来た。

「大丈夫？一日くらい休んでからでもいいのよ」

少年はがば、と跳ね起きた。元気だと見せ付ける

かのように身体をぐいぐいと動かして言う。

「ね、だいじょぶだよ。」

ぼくは、どうしても…どうしても会わなくちゃいけないんだ。会って、それから、老師を探しに行くんだー。」

まさに必死の表情。止めても無駄ね。そう感じて、娘はそれ以上言わなかった。ただ食事のせた盆を、黙って少年の近くに置く。

しかし、彼は手をつけようとしない。

「どうしたの？…いくらなんでも、食べるひまくらいはあるんじゃない？」

そう言われても、少年はおっかなびっくり見守るだけで、さじにすら手を伸ばさない。しかたないわね、と、娘が一口食べさせようとすると、少年はすくなくと後ずさりをはじめた。

「チャ、チャムリさん、これって…子供が飲んじゃいけないものでしょ!？」

泣きそうな顔で指差したのは、子供の手にはちよっ

と大きい、木彫りの椀わんの中。白濁はくだく色の液体。

そっか、とチャムリは納得し、思わずけらけらと笑いだした。

「ほ、ほんとに、草原のこと何も知らないのねえ。

これはお酒じゃなくなって山羊やまのミルクよ。ミルク——おっぱいのことよ。」

きよとん、とする雷遊子。

「じゃあ…飲めるの?」

「もちろんですよ。私たちは毎日飲んでるわ。子供も、ね」
言われて、おそろおそろ口をつける。こく、このどを通してから、また驚いたように顔を振り上げた。

「おいしい!」

「他にもあるわよ。遠慮なく食べてね」

しばらくは口も聞かず、ただ手と口を忙せわしく動かしていた雷遊子だが、なにかの拍子に、その動きがぴたつ、と止まった。のどにつかえたのか、と心配そうにチャムリが聞く。雷は首を振った。

「こんなおいしいもの…老師にも飲ませてあげたいな、って思ってた……」

「いい人なのね。あなたのお師匠さんって」

「うん！北岩の人も、老師みたいな人だといいんだけど……」

チャムリの顔に、すこし陰がさした。

「大丈夫。いい人よ、ほんとに」

六

天幕から馬に乗り、草の海を進む。

先頭にグンニ、そのすぐあとをチャムリが追う。筋肉質で無口なフサンは、雷遊子を抱えるように馬に乗り、右手一本で、乗り手のいない馬を器用に導いてゆく。

進むこと二刻あまり。草だらけのこの世界に、似つかわしくないものがゆらりと見えはじめる。

雷遊子が目をむいた。

「こんなに大きいんだ……」

それは大きな岩だった。草原の海に浮かぶ孤島。まわりの草原との違和感がありすぎる。「こつこつとした岩。まだ距離はあるはずなのに、圧倒的な威圧感に気圧される。」

「やめておくか？わしらとて、無理に連れて行くつもりはないが」

少年はぶるぶると首を振って、

「行く」

ひとこと言つたり馬から飛び降り、岩壁へと向かつて歩いて行く。手にはしっかりと盤印を握り締め、緊張に唇を青くして。

さつとフサンの馬がその脇に寄り、左の腕でひょい、と抱える。そのまま岩へ向かう二人のあとに、グンニたちが後ろからついて行った。

『壁』である。遠目にも巨大な岩だが、目の当た

りにすると、他の表現などしようがない。

大きな岩壁の中、少年背の三倍くらいの高さに、印とそっくりの竜の文様もんよう。その下に、妙な文字が四つばかり列ならんでいる。

「読めるか？漢族の文字でもないようだが」

「これ、ぼくたちの文字だよ。ええと…」

『叩けば…開く』かな？』

「叩く、か？よしよし」

グンニは拳こぶしに皮の切れ端を巻き付けて、岩に叩きつけた。しかし、岩はびくともしない。

「フサン、キツチ、モツテコイー！」

無口な男が、馬の脇から大きな木鎚きづちを引きずり出した。そのはずみで、馬は反対側へよろけてしまう。長は雷遊子をチャムリに預け、木鎚を両手で受け取った。その重みを確かめるように、二、三回ほど軽く振ってから、右の肩こしに大きく振り上げる。そのまま、体ごと大きな鎚となって、岩に跳んで行った。

ずうん

地に響く重い音に混じって、細かく砕けた岩の落ちる、ばらばらという音がかすかに聞こえる。…だが、それだけだった。

「だめか…」

重苦しい空気が、あたりに流れた。チャムリなどは泣きそうな顔をしていた。

そんな中、小さな影ががちよこちよことグンニのそばに寄ってきて、言った。

「みんなでここから離れて。ぼくが、やってみる」

七

岩壁の前に少年が一人。上に羽織っていた青緑色の上着を脱ぎ捨て、手を目の前で妙な形に組んで、じっと目を閉じている。

折からの風に、先ほど砕けた岩のかけらが砂塵となって舞い上がり、雷遊子のからだに当た…らなかつ

た。その手前で、左右へ分かれて行ったのである。何かに阻まれたかのように。

『殻』結果という。自分の回りに、見えない殻を作り出す術である。もちろん、普通の人間にできるものではない。少年は、衝派の術師であった。

仙人ではない。宗教とは一切関わりがない。命そのものである『光』を用い、様々な術を身につけてはいる。が、その本来は、ただ『空魔』の気から、己の身を守るためだけに生まれた自衛の集団。それが衝派である。

前に組んでいた両の手を、すっと上に振り上げる。と同時に、なにやら白っぽい霧のようなものが、その頭上にぼんやりと現れる。先ほど作った『殻』の結果が、一つにかたまるうとしているのだ。

空を仰ぎ、白い塊が大きくなるのを何度か確かめ、十分に大きくなったと見てとると、雷遊子はそれを

まるで掴むかのようにして、そのまま岩壁へ向けて走り出した。

「せえ、のッ！」

掛け声と共に飛び上がり、手を前へ投げ出す。白い塊はそれに従って前に飛んで行った。

飛ぶに従い、球状の塊の先端が細くなり、巨大な爪のように変化して行く。雷遊子がいま使える、最強の大技『白竜爪』である。

大地が揺れた。

白竜の爪は、大岩の中腹に突き刺さり、奥へとめりこんでいく。雷遊子はあわてて術を解いた。

「ごご、ご」という重い音が、なお終わりなく続いている。

「うあ……」

心の中で冷や汗をかきながら、雷遊子はただ茫然と、目の前の大崩壊を見つめるしかなかった。

崩れ落ちる岩。舞い上がる砂ぼこり……

ようやく落ち着くまでに、一刻ほどかかっただろうか。崩れ落ちた岩の間から、黒い影があらわれた。「こらア、どこのバカだ！」

「俺ア『叩け』つつたんだぞ、崩すたアどういうつもりだィー！」

びつくりした雷遊子、自分でも気付かぬうちに、手が型を組む。『光』が回る。みるみるうちに少年を包み込む『殻』の境界。

岩の中から出てきた男は、その手の型を見て仰天した。

「おめえツ、妙…妙漣みよつりん、か？」

少年は手をほだいて、男の方へ走りよる。

「老師の知り合いなの？」

それを聞いた男、表情がふとやわらかくなる。

「老師…ソツか、妙漣の弟子…あいつ、また弟子をとれるようになったのか」

大きく息を吐いて、男はその場にしゃがみ込んだ。「あの、おじさんは一体…」

覗きこむように立つ子供の顔に苦笑しながら、「『おじさん』ってな、止めてくれ。俺アがくしよ岳生たけしょう。おめえと同じ、源流の術師だ」

少年は源流の礼をとった。岳生は軽く返礼して、椅子代りになりそうな岩を探す。

「ぼくは雷遊子っていいいます」

腰をおろしかけた岳生が、その言葉に跳ね起きた。

「まさか…！」岳生の目が丸くなる。

「おめえ、いま何歳だ？」

「よく知らないけど、拾われてからは八年…」

岳生がいきなり雷遊子の頭に手を伸ばし、髪の毛をぐしゃぐしゃにした。

「ンなことくだぐだ言ってんじゃねエよ。八歳って言やアいいんだ、八歳って！」

…そうか、あれから八年経つのかイ。俺も老けるはずだアな」

雷遊子のきよんとした表情に、岳生は思わず吹き出した。

「あはは、覚えちゃいねエよなア。お前を拾い上げた空諾——つと、今は緑宝寺だっけな。あいつがみんなに見せて回ったんだよ。『この子が衝派を救ってくれる』って言ってな。もちろん俺も見た。」

「そんなー！」

「期待されてんだ。悪いこつちゃねエよ。」

「そもそもおめえ、あんな術の使い方じゃ、まだ術師じゃねえんだろ？なのに一人で緑宝寺の外に出てるってこたア、一人でも十分修業できる、って認められてんだぜ」

「えっと、その…」雷遊子は手をばたばたと振って、口ごもった。

「なんだ？」

「本当は、老師と一緒にだつたんです。この…」と、印を懐から取り出して、手の平に乗せ、

「この盤印の使い方を見せてもらいに、『北岩の術師』のところに行くところだつたんです。でも、途中で老師はその…湯磨…なんか、って人に…」

どん、という硬い音。岳生が、拳を地面に叩きつけたのだ。

「湯磨鰓螺！生きてやがったんか！！」

……そっか、そんじゃしかたねエな。妙漣とあの野郎の間にや、深工因縁があるらしいし…

「それで、おめえは一人でその——北岩の術師、だっけ？そいつに会いに行くわけだ」

雷遊子はくりとうなずいて、

「ここは北の方だし、大岩があるし、盤印と同じもようがある、っていうから…」

「悪いが、俺アそんなたいそつな術師じゃねエぞ。」

…しかし…ふん。北岩、かあ…多分、あん人だろうなあ

少年の目が輝いた。

「知ってるの？」

岳生、おや、と相手の目を見て、

「おいおい、北岩つつたら、雷天人のお前エにや縁の深い場所だろ？知らねエわきゃねエだろうが。」

「そもそも雷天…」

と、そこまで言いかけてから気がついた。目の前
のあからさまにいぶかしげな顔。

「…ッと、ちょっとまでよ。ひよっとしてお前エ、妙
漣からなんも聞いてねエのか？」

「うん。なんか、みんなして隠してるみたい。

…雷天人って、なんなの？」

岳生は頭を右手で押さえ、しばらく考え込んでい
たが、不意に顔を上げて言った。

「わあつた、ンなら俺も言わねエ」そのまま腕を組
み、目をつむる。

「ええ!？」

目を開いた岳生。老師の目に似てる…ふと、雷遊
子は思った。

「あいつあたしかに、ちツと考えが歪ゆがんでツけどな
わけもねえのもったいつけるよつな奴じゃあねエ。
きつとなんか、あるんだろ」

言いながら、雷遊子の頭をぼんぼんと叩く。少年

は、まだ納得いかないといった表情で、それでもこ
くりと頷いた。

「しっかし、なんでこんなところ来ちまったんだ？北
岩とここじゃア、まるつきり方向が違つぜエ？」

「これが、教えてくれたんです」言いながら盤印を
差し出す。

「見してみ。

…なるほど、確かに、ここを目指すようにしてあ
る…妙漣か、空諾か…誰がやったか知らねえが、お
前エを俺ンとこに來させたかつたらしいな。

…おや、なんだ？この『光』、これだけやけに目立
つように…」

岳生の考えは、遠くからの声に妨さまたげげられた。雷、
と呼ぶ声。グンニたちだった。

手を振る雷遊子を見つけて、チャムリが駆けてく
る。グンニとフサンは、岳生を見つけると、その場
に留まった。

チャムリは、岳生を見つけるなり、その首にしがみついた。

「岳おにいちゃん、会いたかった!」

目を白黒させていた岳生、とりあえず、首から手を振りほどいて、その顔をじつと見る。

「お前…ソツか、あの時の小娘か。大きくなつたもんだなあ」

雷遊子、何が何やらわからないでいる。

「な…ええと…どうなつてゐるの?」

「ああ、こいつか。」

ずっと昔な、こいつらが襲われてたのを救けたことがあつたんだよ。俺ア救つた何だつてなア好きじゃねエんだが、相手が郭羅派かくらの術師じゆしだつたんでな、黙つてるわけにやいかなかったんさ」

「で、チャムリさんを…?」

「そつ、この小娘が囚とらわれちまつたんで、色々こちゃこちゃとあつてなア」

「こちゃこちゃ、はないんじゃない?」

チャムリが頬ほを膨はらませて抗議する。

「岳おにいちゃんが悪いんじゃない。だいたいあのとき…」

頭を抱えた岳生、手を振つて制する。

「わあつたからよしてくれ、その呼び方。カユくなつてくつから。俺ア岳生だ、『岳生』!」

娘の目がいたずらっぽく光る。助けてくれたときと同じ人とは、とても思えない。雷遊子は信じられない思いでその目を見つめていた。なんか、子供みたいだ……

「そつ呼んだら、約束思い出してくれる?」

「約束ウ?」

「そつ、七年前の約束。思い出さないんだつたら、岳おにいちゃんのまんまよ」

きやらきやらと笑いながら、チャムリは雷遊子をつれて馬の方に向かった。

一人残された岳生、眉間まげんに縦皺を作つて一言つぶ

やいた。

「年頃の娘って奴ア…わからねエ」

八

「でも、なんで岩の中にいたの？」

岩を崩されて、やむなく天幕へと向かう馬の上、岳生の前に座った雷遊子が、いかにも不思議そうな顔で尋ねる。岳生は苦笑した。

「俺ア、強すぎたんさ」

少年は後ろを振り向いた。いぶかしげな表情で、

「え…？強い方がいいんじゃないの？」

やれやれといった表情を作りながら、岳生は、上半身をぐいとねじった少年を前に向かせた。自分は馬の手綱たづなを緩めて、のんびり歩かせながら話しはじめる。

「むかしな——相当むかしだ。俺アお前エの師匠の妙漣と、あと泉確せんたいってやつと一緒になって、正義ツ

ラして暴れ回ったもんさ。

『鉄身てつしん』の妙漣が結界。『神足しんそく』の泉確が浮動呪。

んで俺はもつぱら攻めよ。『衝派せんぱいの三頭竜さんずりゅう』の前に、敵なんざいなかった…」

いつのまにか、チャムリの馬がそばに来て、並んで話を聞いている。手には水筒と、小さな椀が三つ。どうやら、グンニたちは先に行ってしまったようだ。

「つつても、俺たちだつてただの術師だ。どうにもなんねえこたアある。

そんなとき、攻めに徹してるとな、どうしても守りがうざツたくなんだ。だから俺ア、最強の術を作ったかつたんさ。空魔でもなんでも、一発でぶつとばせるヤツをな」

チャムリが茶をいれてくれた。このあたりでは、茶は高級品である。岳生は小さい椀から少しだけ飲み、股の間に置いた。

「妙も泉も止めたさ。そんなもん作っちゃいけねエ」

つってよ。だけど、そんなときの俺にや、んな言葉ア、耳に入らなかつた…で、そんな術はできちまつたつてわけだ」

雷遊子が、また不思議そうな顔で振り向いた。

「それって、まえに空魔が現れる前だよな。…どうして倒せなかつたの？」

その目をじつと見つめる岳生。目の光はやさしそつでもあり、寂しそつでもある。ちよつとだけためらい、やがて息を鋭く一つ吐くと、口を開いた。

「ありやあ、生き物にしか効かねんだよ。」

空魔退治に加わりやしたものの、持つてる術はみんな通じねえ。しまいにや、全滅の報を届ける連絡役だ。あん戦で、唯一の生き残りだぜ。恥が服着て歩いてるようなもんさ！」

苦い顔で、冷めた茶をあおる。

「空魔にや使えねえ術だけど、人に使やアこれ以上のモンはねえ。いらねえ術は封じんのが習わしだけだよ、俺のは強すぎて、誰も封じられなかつた。しゃあ

ねエから、俺ごと封じることにしたんさ」

「い、岩の…中に？」

大きくうなずく岳生。となりのチャムリが、なぜか浮かぬ顔。

「あれだけの大岩なら、ちつとばかりの術じゃ崩れねえからな……」

ただ、こんな術でもいつの日か、要ることもあるかも知れねえとは思つた。だから、おもてに書いておいたんさ。『用があるなら叩け』ってな」

それから先は、だれも口を開こうとしなかつた。

九

それに最初に気付いたのは、岳生でも雷遊子でもなく、チャムリだった。

「ねえ、あれ、なにか変よ」

いま離れたばかりの、大岩のあたり。崩れた石が、なぜか宙に舞っている。複数の術師が『風』から出

てくるとき、必ず起こる現象。

「あんなに大勢、『風』で来るだってエ!!」

「こんなところに、術師が来る用などない。ましてこれほどに正確に、『風』だけ使ってやってくるなど、狙われているとしか考えられない。」

「そうか、あの『光』!!」

雷遊子がつ印から発していた、妙に目立つ『光』、こいつら、あれを直指してきやがったんだ…!

「雷、ヤツらの狙いは、お前エの持つてる印だ。それ持つて、どつか引つ込んでろ!!」

引つ込んでろ、と言われても、あたり一面、身の隠しようのない草原。岳生、思い余つて雷遊子を上空高くはね飛ばす。大岩の残骸あたりへ、うまく落ちたのを見てとり、そのまま風の巻く場所へと、馬を走らせた。

それが、いけなかった。

「きゃ…!!」チャムリの悲鳴に振り向いたが、そこ

には馬の影すらない。かわりに前の方から、しわがれた声が聞こえてきた。

「岳生かア、ひつさしぶりだなア」

聞き覚えのある声に、勢いよく声の方を向く。勢い余つて姿勢を崩し、馬から落ちてしまった。馬はそのまま、あらぬ方向へ駆けて行く。もう逃げられない。

「さあ、緑宝寺の盤印とやら、渡してもらおうか」

いや、逃げるわけにはいかなかった。

「さもないと、この女がどうなるか…」

相手の右腕は、後ろ手にしたチャムリの両腕を、がっしりと押えつけている。いつの間にかやられたのか、口には布を噛ませられ、ただ睨み付けることしかできないチャムリ。

その後ろには、四人の術師が固まっている。スキがつけない。

岳生の頭の中を、七年前の出来事がよぎった。七

年も身を封じること、いろいろな記憶が薄れてゆく中、どうしても頭の中から離れなかったあの出来事が――

十

郭羅の連中の目的は、もともとは単に馬が欲しいだけだった。

草原に住む者にとって、馬は命と同じくらいの価値がある。グンニをはじめ、男たちはみんな総出で、奴等やつらに対抗した。だが、相手は術師——それも、容赦を知らねえ術師だ。普通の人間に、太刀打ちできるはずなんざなかった。

俺が彼らに会ったのは、ちょうどその時だ。術師でもない相手に、術を振るつような奴はいくらなんでも許せねえ。かつて三頭竜として暴れまわったころの血が、騒いだ。

術を使って、俺はあっさりと奴等を追い返した。あ

まりにもあつけないその戦いの中で、俺は取り返しのつかない過ちを犯した……名を名乗ってしまったのだ。

『三頭竜』の岳生。無敵の術を持つ男——その名を聞いて、強欲な奴等がどう思うか、そこまで考えがまわらなかった俺は、やはりのぼせていたんだろつ。

そして、チャムリが捕まった。今度の奴等は、俺を狙って来たんだ。最強の術を教えると迫られた俺は、身体に教えこませてやった――

あの恐怖の術を食らって、無惨に倒れる男を目のあたりにしたチャムリ。助け起こす腕を振りほどく小さな手。そしてあの怯えた瞳こぼれ。

こんな術は使えねえ。誰も、二度と使っちゃならねえ!! そう自分に言い聞かせて、俺は岩の中に飛び込んだ。あの術は、偶然にできちまったもんだから、俺がいなくなれば使える奴は出てこねえだろう。

岩の外に彫った文字は、墓標のつもりだった。叩

いたくらいで壊れるような岩じゃねえし、叩かれたからって出るつもりもねえ。ただ、最後まで術師でいたかっただけのことだ。

岩に籠ること自体は、苦でもなんでもなかった。だが俺は、あの子とひとつ約束をしていた。粗暴だのなんだのと言われちゃいるが、約束を破ったことは一度だってない。その俺にとって、この約束破りは辛かった――

さてよ?……約束!?

『岳おにいちゃん。あたし、おにいちゃんのおヨメさんになっただけ。』

差し出された小さな手。七年前の、小さなチャムリ。空鷹を倒す手助けすらできなかつた自分を責めて、緑宝寺を出て以来、忘れていた笑顔を取り戻してくれたチャムリ。

『ははは……お前が十八過ぎたら、こっちからお願

するかもな……』

『ほんとうね?ほんとうよ!約束だからね――』

十一

「思い……出した!」

目の前に、まるで昨日のことのように浮び上がる、あの声。あの姿。

「俺のことなんざ、二年もすりゃ誰ひとり覚えちゃいめエ……それが俺の罰だと思つてた。それなのに……たははッ、七年も……十八になるまで、あの娘ア待つてたつてエのか!」

苦笑しながら、前を見据える。

「んなことも知らねエで、俺ア岩ン中で昼寝してたつてエのか!」

もはや、彼の眼中に敵の術師たちの姿はなかった。自分と、チャムリと、そして彼女を掴まえている男。それしかない。

「どうだろうが、死なせるわけにヤアいかねエ……」
黒い瞳が、鈍く光った。

「いやあああ——」

そのとき、かけ声と共に、大岩の上から何かが飛び降りて来た。それに気付いた術師たちが振り返る。それは少年——雷遊子だった。

術師同士の戦いで、空に飛ぶのは下策中の下策である。術師たちは『ばか』とでも言いたげな顔で、各々術をふるう。まさに狙い撃ち、はずすわけはない。のだが、当たらない。雷遊子の足元には『殻』の結果が張られている。岩をも砕く『白竜爪』、その源たる結果ごと落ちていたのだ。

術師たちが、あわてはじめた。各々、己の術に自信はある。それをまとめて食らってもびくともしないあの結果。あんなものが頭から降って来たらどうなるか——

チャムリを掴まえていた男も、ふとそちらに気をと

られる。その瞬間を岳生が見逃すはずなどなかった。「チャムリ！俺のヨメになりたきゃ、走れ！」

娘のびつくりした顔が笑顔に変わるまでに、ひと呼吸いらなかった。チャムリはつかまれた腕にかまわず、だつ、と駆け出した。手を振りほどかれた男が素早く駆け寄る。だが、ほんの一瞬だけ、二人が離れた。

岳生には、それで十分だった。

「地獄で反省しやがれ——『莫生』!!」

かけ声一閃。その途端、男の体から肉が崩れ落ちて行った。追いかけてよつと動いた腿から肉が溶け落ち、骨が解け落ちる。たまらず地につこつとする手が肘から抜け落ち、地面に着く前にその形を失っていった。痛みがするのかわ、叫ぶ声が喉を震わせる。首の肉がその震動にしたがつてほろと吹き飛び、あらわになった骨がかさかさとして崩れ落ちて行く。支えを失った頭がころりと落ち、胴と同時に粉となった。

莫生破。『破』の一字は飾りにすぎず『莫生』とい
うのが本来の名前。すなわち「生きるな」である。

岳生があみだし、いまだ岳生しか使えない術。相
手が生身である限り、決して耐えることの出来ない
最強の秘術。

避ける手段はただ一つ。結界である。だが、なま
じの結界では避けられない。四人が全力で張らない
限り、まず破られるだろう……しかしそんなものを
張ってしまったが最後、そうやすやすとは動けない。
上からは迫り来る巖のごとき結界。横からは必殺の
莫生破。

『やられる』と悟った四人。それでも必死に結界を
張り、その一瞬を待つ。と、その中央で風が巻いた。
風を中心になにやら黒い影が現れる。その影は四人
を風に包み、かき消すかのように姿を消した。まさ
に、一瞬のできごとだった。

雷遊子は困っていた。このまま落ちたらただでは
すまない。が、どうすればゆっくり降りられるかもわ
からない……そんなことは習っていないのだ。考え
込んで落ちるだけ。地面がだんだん近くなる。そ
こではつと思いついた。なんだ、足の下に敷いてる
の、結界じゃないか――

雷は結界を解いた。そして今度は、真下の地面を
覆うような結界を張る。半球状に張られた結界を転
げ落ちるように地面に倒れた。

駆け寄ってきた岳生の首には、チャムリがぶら下
がっていた。少年はすぐさま跳ね起きて、口の布を
ほどいてやる。

「ありがとう！」最初に、チャムリが言った。

「ずっと言いたかったの。」

たすけてくれたのに、いやな顔しちゃって。その
まま岩の中に隠れちゃったでしょ。どうしても言い
たくて、ずっと、そればかり考えてきたの。

「——ありがとう、岳おにいちゃん!!」

岳生は頭を掻きながら、チャムリに背を向けた。そしてただ一言。

「思い出したんだから……岳生』って呼んでくれや」

二人を見ながら、雷遊子はちょっと居心地が悪そうに、それでもにっこりと笑って、ひとり天幕の方へ歩きはじめた。

十二

「おめえよ、あれじゃやばいぜ」

え、と振り向く雷遊子。チャムリに救けられた、あの天幕の中。わずかながら分けてもらった水と食料を袋に詰め込み、ここを去るつとする少年に、岳生が言った。

「さっきの戦い方だ。あんなんじやア、そのうち死ぬぜ」

「あれの……どこが？」

「わかんねエか。わかんねエよな。昔の俺も、やっぱりわかんなかった。だから、最後は若ん中に身隠すハメになっちまったんだ」と苦笑して

「おめえにまで、俺の二の舞はさせたかねエんだよ」「でも、どこが……？」

「こればかりや、口で言ってもわかるこつちゃねエよな。……つつつても、俺ア』教える』ってエな苦手だし……」

そうだ、俺の知合いに、武術の得意なじいさんがいる。一筆書いてやツから、そこ行ってみな」

懐から、古びた竹簡を取り出して、さらさらとたたためると、雷遊子に押し付ける。

「じゃ……ちよいと印かしてくれ」

何やら盤印の上で手を結ぶ。と、雷遊子には、確かに光の様子が変わったように見えた

「ほら、ここに来たときと同じ要領で、こいつに従って行きやアつく。おまけにあの妙な光も消しといた

から、さつきみてえに、いきなり襲いかかられることとねエぞ」

雷遊子は盤印を握ったり、撫でたり、確かめるようにいじり回してから、懐ふところの奥にしまい込んだ。

「岳生さんは、緑宝寺には帰らないの？」

岳生は草の布団に腰をおろし、その感触を試すかのように幾度か押していた。

「俺アしばらく、こいつらと一緒に居るよ。緑宝寺に会ったら、そう言つといてくれや。

術師じゃない生き方も……ま、悪くはないかも知れねエしな」

片付け終わった荷物を背にかけて、天幕の入り口に向かいながら、雷は首をちよつと後ろに向けた。いたずらっぽい目が、そこに光っている。

「チャムリさんよろしくね」

天幕の扉を開けながら、からかい気味に言う雷遊子に、岳生がひとこと返した。

「さつさと行ッちまえ、このマセガキ！」

十三

岩しか見えぬ山の中、何も無い空の間はざまから、一つの影が落ちてきた。

影はすぐさま人の形をとる。はつとしたように顔を上げると、抱えていた杖の上端、蓋ふたのようなものを取り去り、左手で中程をつかんで大きく空を裂いた。とたんに、あたりが霧のようなもので覆われる。

彼の背は、なにかに押し当てたように平たく変形し、見る間に濡れていく。それと同時に、墜おちち方がすつ、と緩ゆるくなった。

やがて、その体が大地に触れた。彼は飛びおきると、顔やら身体やら、手当たり次第にさすりはじめ。全身はびつしよりと濡れていた。

「あつツ……くうツツ！」

——いつもながらとは言え、空の中の水つていうのは、どうしてこう痛いんだらうな！

ぶつくさと文句を繰り返す彼の耳に、風を切るよ

うな音が響く。振り返った瞬間、避ける間もなく子供がのしかかって来て、二人はそのままひっくり返ってしまった。

「大丈夫かい、風くん。……おい、風遊子！」

ゆさゆさと揺すぶられるうち、ようやく小さな眼が開きはじめた。

「あ…鮑采さん」

ほっと息を吐き、少年の体をあちこちさす。大きな怪我は見あたらない。

風遊子はしばらくぼうっとしていたが、突然はね起きて、腰の袋を探った。取り出した玉には、傷一つない。そのまま玉を抱き締めるようにして中に見入った。

「あ、もとに戻ってる！」

どれどれ、とのぞき込む鮑采。ひそかに安堵のため息をもらし、

「うむ。どうやら乗り切ったようだな。それに…」

玉のすみにかすかに映る黄色の光点を指さし、

「これが緑宝寺だとすると、一気に五百里ほど来たことになる。雷くんまでは、あと三百里ちょっとか。これなら追い付けるな」

「そうだね。じゃ、すぐ…」

指を十字に組み、空を見つめる。『風』に乗るときの基本の構え。

「ちょっと待った。風遊子、雷くんの方に、風が流れているのかい？」

風は、しかたない、と言った雰囲気構えを解き、目をつむって『風』を見る。

「ええと…ああ、だめ。近くのはやっぱり逆方向だ」

「だったら歩こう。三層より上の『風』は、当分の間、使用禁止だ」

その言葉に、ちょっと頬を膨らませかけた少年は、あきらめて下を向いた。

「はあい」

しょんぼりとする少年の肩に、手が置かれる。

「間違えてはいかんよ、風くん。他人を救けたければ、まず自分が生きることだ。いかな苦境に立たされようと、どれほどの恥をさらそうと、まず生きて、相手の前までたどり着くことだ。」

…それだけの覚悟がないなら、助けに行く、などと軽々しく口にしちゃいかん」

口調こそやわらかいが厳しい言葉に、恐る恐る顔を見上げる。男の顔は、静かな表情を浮かべていた。怒るでなく、たしなめるでなく。ただ静かに、顔で風遊子に問いかけていた。『わかるか?』と。

「はい!」

ぶん、とつなずき、また明るい表情に戻った少年を見て、鮑采はにつ、と笑って言った。

「じゃあ、まず飯にしようか——」

むかしのはなしである。

第五回 盾の勇者

一

むかしのはなしである。

今で言うなら中国のある場所。広い大陸を一人で歩いている人物があつた。北方の草原から、人里の多い南へと。

もちろんそのこと自体は、特に珍しくもない。珍しい点があるとすれば、その背格好であろう——明らかに、幼いのだ。

歩いていたのは十歳くらいの少年だつた。青い麻の衣に、旅草履。背にかけている袋からは、つい最近まで着ていたであろう、皮の上着がはみ出ている。頭に浅い葦の笠、胸には小さな皮袋。その中には何か硬いものが入っているらしく、歩きたび汗になつた衣にあたって、ぺたぺたと音をたてている。

遠くに蝉のわめく声。

空飛ぶ鳥も鳴き声忘れ、

湧水さえも煮え湯のよう。

暑い。つい最近まで北の地にいた少年にとっては、耐えられないほどに暑い。夜中に歩き、昼過ぎには寝る生活がこここのところ続いていた。

二

その日の昼前ごろ。宿が見えてきた。このあたりの宿屋は食堂を兼ねている。麵を作っているらしく、盛んな湯気の中に混じつたつゆの香りが鼻をくすぐる。幸い、少年はまだいくらもお金を持っていた。久しぶりで宿に泊まるうと暖簾をくぐる。

…と、そのとたん、顔の横を何かがよぎつた。背後に何かが割れる音。振り向くと、粉々に割れた焼きものが散らばっている。

「邪魔すんじゃないやねえや！」

カン高い声が少年の耳に届いた。暖簾のむこうで、なにか騒ぎが起こっているらしい。少年は驚いた様子もなく、中へ入って行った。

「こんな幼い娘にいたずらしようたあ、おまえらもう人間じゃねえな。容赦しねえから覚悟しろよ！」

そう言ったのは大柄な青年。彫りの深い、四角い顔。その中で、目だけが鋭く輝いている。まくり上げた袖からは、雑巾を絞ったかのような無駄のない腕。大きめの笠を右手に抱え、左手を広げて何かを庇っている。よく見るとその後ろに、少年と同じくらいの年齢好をした女の子が、怯えた目をして立っている。

「いたずらだあ？ふざけない！俺ツちがんな小娘欲しがるとんかい。その娘を欲しがってんなあ、もつと偉エお方よ。寄越さねえと、てめえもただじゃすまねえぞ！」

こちらは三人ほど。年は青年より上、体格も一回

りほど小さいようだが、手にはそれぞれ剣を携えている。

店の奥では、主人とその妻が抱き合って、ただ震えるばかり。その張り詰めた空気の中、不釣り合いな表情で少年は立っていた。男たちは、それに気付く様子すらない。

三人の男たちは、それぞれ青年を囲むように間合いをとった。その内の一人が、卓の上にあつた井に服を引っかけて、落してしまふ。

がしゃん！

派手な音が合図となつた。青年の正面にいた男が、剣を大きく振りおろす。物騒な刃が青年の顔を襲い当たる寸前、傍に逸れた。男は「まさか」といった表情で、逸らされたわけを探る。そこにあつたものは——葦の笠であつた。

あまりのことに、一瞬、男の動きが止まる。青年はその隙を見逃さなかった。剣を逸らした笠を、回しながら力任せに叩きつける。強烈な一撃を首に受けた男は、そのまま白目を剥いて崩れ落ちた。

「野郎ツ！」

右から怒声が響く。斜め上から袈裟がけに剣の一撃。その平らな面に添うように出された笠。いくら力をこめても、しよせん剣は長物。横から、しかもより広いものに押されたのでは、真つ直く振り抜くことなどできはしない。とどめを刺そうと笠を持つ手に力をこめた青年は、しかしまだまだ若かった。相手は三人いたのだ。

三人目はさすがに用心していた。声を立てず、素早く背後に回り込むと、剣の柄を腹に押し付け、そのまま体ごと青年にぶつかって行った。殺気に気付いた青年が、目の前の相手を笠の角で殴り倒しながら首だけ振り向く。すでに止められる距離ではない。

避けようにも、剣の先には庇っていた少女。腕の一本はやむなし、と刃の痛みを待った——だが、それは来なかった。

迫る刃が、目の前で何かに止められたのだ。勢い余って、柄が男の腹にめりこむ。人とは思えない声を発して、男はそのまま前のめりに倒れていく。その体もまた、地面にはたどり着かなかった。またしても止められたのだ。何か…壁のようなものに。壁に押し付けられた顔が、潰れた饅頭のように醜く曲がっている。

青年は啞然としながらも、見えない壁に手を触れようとした。

「あ、触っちゃだめだよ。ものすごく硬いから、それ」
声の方を向くと、少年が立っていた。手を不思議な形に組んで、なにやら真剣に念じている様子。

「待ってて、いま解くから」

手をすつと合わせる。ぱん、と音がすると同時に、壁にもたれていた男が支えを失い、顔から床に突っ

込んだ。

「へえ…きみ、術師かい？」

青年はさして驚いた様子もなく、ただ確認するだけといった調子で尋ねる。

「知ってるの？」

少年の方がかえって驚いた。いままでの旅で術をつかって、こんな反応をする人なんか見たことがない。同じ術師ならまだしも…

「老師の知り合いにそういう人がいるらしいけれど、目近で見るのは初めてだよ。」

…ま、とにかく、助けてくれてありがとう。僕は武達。きみは？」

「雷遊子だよ」

そう言いながら、少年は襟をうちわ代わりに、ぱたぱたと扇いだ。胸元の汗が、いかにも暑そうである。

「仙人みたいな名前だね。で、その後ろのお嬢ちゃんは？」

雷遊子、驚いて振り返る。まったく気付かぬうち

に、あの女の子は自分の背中に回り込んでいた。

「彩花よ」

少女は、倒れた男の一人を、爪先でつきながら答えた。雷遊子よりちよつと小さいくらい。小さな顔に、大きな目、それでいて全体としては整った顔立ち。

あまり長くない髪は木の櫛で止めただけ。上等ではないが、清潔そうな木綿の服を、白い布地の帯で押さえただけの姿——ひどい格好ではないが、なんとなく寝起きのまま立っているように見える。そのせいか、あるいはいままで、自分と同じくらいの歳の女の子を見たことがないためか、雷遊子は少し落ち着かない気分だった。

そんなことにはまったく構いなく、少女は口を開いた。先程まで震えていたとは思えない、しっかりと口調で

「まったく、かれんな女の子相手に剣振り回すなんて、どういう神経してるのかしらね！」

「どれだけついても男が起きないのを見てとると、大きく足を振って、その頭を蹴り飛ばした。それで気が治まったのか、呆気にとられる二人に振り返ると、天女のように微笑む。

「救ってくれてありがとう。二人ともすっごいのね」
おもわず雷遊子は思った。

(こわいな、この子——)

三

術師。歴史の表舞台には、決して出てこない存在。己が生き延びるため、空魔という敵にひたすら立ち向かい続ける者たち。雷遊子は、その衝派術師の見習いである。

もちろん、いくら術師見習いとは言え、十歳とっに満たない子供を一人で修業に出すなど、考えられないことではある。雷遊子にはやむを得ざる事情があった。胸の皮袋に入っているのは、衝派の呪具の中でも

最強と言われる緑宝寺盤印りよくほうじばんいん。しかし長い月日の間に、その使い方は忘れ去られてしまった。今や知る者はただ一人——北岩の術師と呼ばれる人物のみ。この人物に会うために彼は、この広い中国大陸を旅していたのだ。つい数ヶ月前までは師の妙連みようれんと共に、そして、いまは一人で。

彼の師は、いま十一年前に倒したはずの宿敵と相対している。いつか必ず会えると信じて、彼はただひたすらに、与えられた仕事を果たそうとしているのである。

四

武達は店の亭主にいくらかの金を握らせると、二人の子供をつれてその場を立ち去った。渡した金は、食事代に割れた椀の代金、それに迷惑料が少し。細かい持ち合わせがなかったので、入り口の脇に積んであった蒸したての饅頭を三つ四つ、釣銭代りに失

敬するのも忘れない。

店を出て五刻ほど。小高い丘の上で、三人は円のように座り饅頭を頬張っていた。腹もくちくなくなつた頃、武達が口を開いた。

「雷君、と言つたね。きみはどこへ行くの？」

雷遊子は懐から印を取り出すと、しばらく眺めてから口を開いた。

「この…近くだね。朧諧さんたんかいつて言う、武術の達人がいるんだつて。その人に会いに来たんだ」

武達が、おや、といった顔になる。

「武術の達人で、朧諧だつて？…ひよっとすると、朧諧玄跋たんかいげんぱつつていう人かい？」

「そう、その玄跋さん。知ってるの？」

青年は起こしかけた体を倒して言った。

「やれやれ、妙な縁だなあ。その人は僕の老師だよそれ、あそこに見える町のはずれに住んでおいでだ」

指の指し示す先を、少年の目が追つ。

「僕は別に用があるから、ここでお別れだね。朧諧老師にお会いしたら、近々立ち寄る機会があるだろうから、よろしくと伝えておいてくれないか。

あの人は、皇帝からのお召しさえ、気が乗らないと言つて断るくらいだけど、僕の知合いなら、多分会つてくれると思うよ」

彩花は、二人の話しを傍わきからただ眺めていた。その視線に、たつた今気がついたように武達が振り向いた。

「きみはどうするの。近くの村なら、送つてあげてもいいけど」

少女は少し顔を曇らせ、ふう、とため息をつく。

「それが、わからないの。今まで村の外に出たことがなかったし、

…ほんとにいきなり、こんなどこに来ちゃったから、どこへ帰つたらいいのかさっぱり…」

「おかしな話だけど…まあ、わけがわかるまで少し落ち着いた方がいいね。さっきの連中が、また来

ないとも限らないし。

…雷君と一緒に、聆諧老師の許に身を寄せるといい。一筆書いてあげるよ」

懐から黄とも茶ともつかない色の紙を取り出すと、腰帯にはさんであつた小さな筆で、なにやらさらさらと書いてゆく。雷遊子はそれを、不思議そうな目で見つめていた…彼が紙を見るのは、これが初めてなのだ。

「そら、これでいい。じゃ、僕は少し急ぐから、これで失礼するよ。十日くらいしたら僕も老師のところへ行くつもりだから、そのときまた…じゃ、元気でね」

言い終ると立ち上がり、子供たち二人に手を振って立ち去った。

武達が見えなくなる。ふと振り向くと、目の前には饅頭がまだ一つ残っている。雷遊子はそれにひょい、と手を伸ばした…だが、手が届く前に饅頭は消

えてしまう。彩花が横からつまみ取ったのだ。

「いけないのよお。一つしかないんだから、二つに分けなきゃ」

小さい子を叱るような口調に、雷は頭を掻いて謝つた。彩花がそれを見てきゃらきゃらと笑つ。つられて雷遊子も笑つた。

二人はその饅頭を半分づつ平らげると、町へ向かつて歩いて行つた。

五

町はずれ。聆諧の家はすぐにはわかつた。活気のある町に似合つた、大きめの屋敷。そのわりには門や飾りに凝るわけでもなく、中はただ広いだけで、がらんとしてゐる。主を呼ぼつと雷遊子が息をすつた瞬間、どこからか声がした。

「武達の知合いかな。さ、遠慮せず入りなさい」
びっくりしてあたりを見回す。が、誰もいない。お

そるおそる中に入つて行くと、突然目の前に人が浮き出した。

雷遊子がつつさに手を組み、结界を作るつとする。彩花はその背中にしがみつきながら、目は目前の人物から離さない。

「これこれ、術など使つでない。わしは朧諧玄跋じゃ。お前さんたちは、わしに用があつてきたのじゃないのかの？」

少年は结界を解き、朧諧を名乗る男に近付いていった。そこには、一人の老人が目をつむつたまま座っていた。背格好は雷遊子よりふた回りほど大きいくらい。しわの中に埋もれた目鼻。うなじのあたりできつく縛つた白い髪。目の詰まつた木綿の着物に、麻のはおり。薄暗いので、色まではわからない。

老人が目を開けると、温和そのものといった顔で、二人の子供を眺めた。何もかも見通すよつな、深い目の色。

ここで初めて、雷遊子は自分の目的を思い出した。

懐から手紙と竹簡をひとつづつ取り出すと、棒読み調の挨拶を述べながら老人に手渡した。

一通は、先ほど武達青年からもらった紙の手紙。

もう一卷は、ずつと北の地、草原のただ中にいた彼の師の友人、岳生から預かつた竹簡。こちらの手紙を朧諧に渡し、その教えを受けるため、彼はわざわざここまで来たのである。

朧諧は二つの手紙をざつと読むと、まず彩花に向き直つた。一言二言話すと、奥の方につれて行く。再び現れたときには、その腕にいくつかの道具を抱えていた。

「あの娘は、しばらくここに住まわせるとしようかの。自慢するわけではないが、わしを知っているなら、まず襲つてなど来るまいて。

さて…岳生の方じゃが、だいたいの事情はわかつた。要するに、戦いの基本がなつてない、ということとのようじゃの。たしかに、そうなるとあやつでは

教えきれんじやろつ」

腕いっぱいに抱えた物を、雷遊子の前に放り投げる。よくよく見ると、それはすべて武器であった。

剣、刀、槍、斧…その中で、ふと少年が目を止めたものがあつた。聆諧も、その視線に気がつく。

「ほう、盾がよいか。ずいぶん珍しいの」

「あの、武達さんが笠で戦つてたの、盾でも出来るかな、と思つて…」

言いながら、なにかとんでもないことを口走っているような気がして、雷遊子は赤くなりながら口を閉ざした。老人はその様子を面白そうに眺めている。

「武達の盾はチト乱暴じゃでな。わしとしてはあまり薦められん。が、盾というのは決して悪い選択ではないぞ」

不満そうに見上げる雷遊子。その顔に、聆諧が笑い声を上げた。

「ふおふお…別に、馬鹿にしたわけではない。むしろその逆じゃ。盾を使うのは、大人には難しいん

じゃよ。とにかく、柔らかい身体と細かい動きが要る技じゃでな。

では、チト見本を見せるとするかの」

老人はそう言うなり、すつくと立ち上がった。ただ腰を上げただけなのに、その左手にはいつの間にもやら盾が吸い付いている。あつけにとられる少年を尻目に、左手が動きだした。

前へ伸ばす。肘を引いて縮める。縮めたはずなのに、盾の位置は変わらない。身体が前へ動いたのだ。足などまるで動いていないのに。

「これを静歩という」

雷遊子はふうんという顔で見ている。

「どうもわからんようじゃな。では、これならどうじゃ」

言うなり、少年の目前に盾が突き出される。反射的に払いのけると、そこには聆諧の顔が迫っていた。

「長物の武器、すなわち刀剣や槍の類は、この間合いではまず使い物にならん。じゃが盾は、わしの盾

は、この間合いから勝負じゃ」

少年の驚く顔を、底知れぬその目で嘗め回すかのように見つめると、にやりと笑って顔を離す。

「『盾三法』というのがある。知っておるか」

少年は首を横に振った。老人は地面に三つの文字を書く。

『受』『流』『弾』……

「なに、簡単じゃ、これだけじゃよ。相手の武器を受け、動きに逆らわず『流』し、そのまま『弾』き飛ばす。

——じゃが、これは盾のほかに武器を持ったときのことじゃ。普通はこれでもよいのじゃろうが、わしの盾は盾だけで攻める。そこでじゃ……」

老人は、さらに文字を書き足した。

『吸』『転』そして『撃』……

「盾の動きを相手にあわせ『吸』いつくかのように

自在に導き、その力を逆に相手に『転』ずることによって封じ、そして盾の『撃』を食らわせて倒す。

これが、わしの盾じゃ。先の『静歩』は『吸』と『転』の基本じゃて」

「こんなに覚えなきゃいけないんだ……」

はあ、とため息をつく雷遊子に、老人が微笑みながら言った。

「実は、こんなものは覚えるものではないのじゃよ。世に武術の使い手は多くあるが、ほとんどはただ師の教えを継いでおるだけだな、自分で考えることをせん。いま言ったのも、そういう馬鹿者のために、教えやすくするための方便に過ぎん」

少年は不思議そうな顔で聞いている。その頭を撫でながら、老人は話し続けた。

「単に武術を教えろと言つたら、今言つただけ、たたき込んでしまえばよいのじゃがな、それでは本当の『戦い方』なんぞ一生かかってもわかるまい」

腕につけていた盾をはずし、その顔を少年の顔に

近寄せる。

「風林火山の法というてな。」

防^{まも}つては、

風のごとき疾^{はや}さを内に秘め、

林のごとき静かに待つ。

ひとたび攻^せむれば、

火のごとく止^{とど}まることを知らず、

山のごとき一撃をもって倒すべし。

これがわしたち本来の戦い方じゃて」

少年は言葉の一つ一つを、噛みしめるように聞き

ながら、それでも疑問が頭をよぎった。

「攻めるだけじゃいけないの？」

「いやいや、攻のみを採^とるとしてもな、

風あらば火は勢いを増し、

林あらば山は富む。

というものじゃ。

相手の勢いに止められず攻め続けるには、どうしても疾^{はや}さが要る。いかなる恫喝^{しうかく}にも耐え抜く胆力は、絶対の一撃になくってはならぬものだ。

これすなわち

風なき火は一椀の水に消え、

林なき山は一陣の風に崩れる。

の道理。難しいかの？」

「うん」

雷遊子の額に、箸^{はし}が挟^{はさ}めそうなくらいの縦じわができた。

「焦ることはないぞ。お前さんはまだ小さい。わしが本当の基本を教えてやろう。お前さんは旅せねば

ならんのだろう？ 岳生が言つよつに、これからも争いごとに巻き込まれるようなら、後のことは自然と覚えて行くじやろつて。まあ、覚えねば死ぬだけじやての。

では、早速はじめるかの。雷遊子、こつちに来るんじや」

六

静かな部屋の中、流れるような一連の音が、あたりにこたえました。

トーン…トツ、パーン…

暫くしてまた同じ音が響く。

トーン…トツ、パーン…

「いい音ですね。老師」

笠を浅くかぶつた青年が、老人の横に腰掛けながら言つた。

「おお、武達かい」

「しばらく来ないうちに、また弟子でも取つたのですか？ こゝからでは見えませんが…」

老人は目を開けようとしめない。し、わのわずかな動きで、微笑んでいるとわかるだけである。

「何を言つておるやら。あの子はお前が紹介したんじやろつが」

「え…と言いますと…まさか雷君、雷遊子？——しかし、あの子はまだ来て十日あまりしか…」

「うそだと思つたら、行つてみるがよかる」

不審そうな顔で奥へ向かう武達に、後ろから声が飛んだ。

「不思議に思つたら、足を見ることがじゃな。めつたに拝めぬ『天賦の才』というものを見られるぞ」

振り向きもせず頷くと、敷居をくぐつた。

奥の方に、一人の少女がいた。野菜でも入っているのだろう、腰ほどもあるか、この端に腰をおろして、

何やらじっと眺めている。

武達は、その子に向かつて手を振った。彩花である。少女はそれを見てにつこり笑うと、また元の方
向に視線を移した。

視線の先——広い空間の端の方に、柵のような物がある。高さ一丈余り、大人が四人乗れるくらいの広さ。横にかけてある梯子はしこを伝つたつて、雷遊子がその柵に登っていた。

柵で少年は前を向く。そこには大きな、ぶ厚い板がぶら下がり、その下には盆のような板が敷かれていた。そこへめがけて、少年は勢いよく飛び込んで行く。

武達は知っていたのだが、その足元の板には仕掛があった。それは少年の足の力を受けてゆらゆらと揺れ動き、その体を絶えず倒そうと試みるはずである。——だが、そうはならなかった。少年は板が揺れ動く前に、正面の板を手のひらで打ちさえ、板の動きを完全に消し去ってしまったのである。

武達には信じられなかった。雷遊子がまだ子供だからというのではない。自分が数年かけて会得えとくしたことを、十日足らずで覚えるなど、彼には考えられなかった。

「雷君！」

梯子を登ろうとした雷遊子は、その声でようやく青年に気がついた。

「わるいけど、ちよつと来てくれるかな」

先程からこの修業を続けているのである。赤くなつた手を擦こすりあわせながら、少年は武達の前に立つた。

「すまないけど、足を見せてくれないかい」

少年は不思議そうな顔をして、それでも素直すそに裾をまくる。薄暗い中に浮び上がった二本の柱に、武達は仰天した。

（足か、これが？）

それはまさに、柱と呼ぶに相応ふさわしいものであった。少なくとも、その小柄な体からは想像もつかない。

じつと見つめていた彼の耳に、以前朧譜から聞いた話が蘇よみがえってきた。

『術師のうち、守りを主とする結果の使い手は、自然と「不動の力」を身につけるものだそうじゃ……』
 そうか、とかれは思った。十日で会得したのではない。この足は、おそらく数年をかけ、術師として培つちかってきた彼の宝なのだ――

「足が、どうかしたの?」

「……いや。悪かったね、修業の邪魔をしてしまって」
 青年は、頭を振りながら、その場を後あとにした。雷遊子はその後ろ姿へを不思議そうに見ていたが、再び柵の上に向かつて行く。奥の方では野菜かごを抱えた彩花が、その姿を飽きもせず眺めていた。

門の手前では、朧譜がまだ陽ひに当たっていた。目をつむり、眠っているようにも見えるが、そうでないことは、武達が一番よく知っている。

老人のそばを通りすぎるとき、彼は吐き捨てるよ

うに言った。

「少々長めの修業に出て参ります、老師」

朧譜は薄目を開けて、青年の後ろ姿を見送っていた。満足げに、微笑みながら。

七

「朧譜老人の御宅とお見受け致す」

野太い声が、そこらに響いた。武達が去って一月ほど後のことである。

「なんじゃな、騒々しいが」

門の手前に現れた朧譜は、そこにいた二人の男を見て、やれやれと頭を掻いた。

「おお、朧譜玄跋老でございますな。お初にお目にかかり申す。私は禁軍きんぐん武術指南殿むげんの使い、王史栄おうしえいと申します。

実は指南役、先頃病にてお努めあいならず。後任を早急さうきゅうに決めねばなりません」

老人は、男の話しに大きなあくびで応える。

「また、皇帝陛下の気まぐれかの。前にも言ったが、わしはお断りじゃ」

「は、承知しております。…しかしながら天下の禁軍を指南するお役目。それより優れた武人が野にいますなど、許し難きこと、という天子のお言葉あり申した。重臣一同協議の結果、我らの選んだ武人が、ご老人に優るならば、ご納得も頂けようかと…」

一見、礼儀正しく聞こえるが、彼の目はぎらりと輝いている。裏があることは、誰の目にも明らかである。

「なるほどのお。うまいことを考えたものじゃ。陛下はわしを最強の武人と信じ込んでおるから、わしを倒せば、お主ら一門は天下に名を轟かす。こんな老人一人、どうとでも料理は出来る、かのお。

雷君、ちよっとおいで」

いきなり凶星を指されて緊張した男たちは、屋敷の中から何者があらわれるか、息を飲みつつ見つめ

ていた。が、出てきたのが子供だと見ると、指をさして大きく嘲った。

「こちらの方々が、お手合わせ願いたいそうじゃ。練習がわりに、軽くお受けしなさい」

男たちはまだ嘲いを止めない。

「ほ、本気かな、ご老人。たとえ相手が誰だろうと、手加減は致しませんぞ」

嘲諧は相手を見もせずと言つ。

「その方がよからう。下手に手加減などすると、命を落すことになるでな。…では、こちらへ入りなされ」

嘲いは憤りに変わった。二人の男は鈍い光を放つ目を見合わせながら、屋敷に入っていった。

「武具じゃが、これを使うんじゃ」

差し出されたのは、笠であった。受け取った雷遊子は、もう少しで取り落とすところだった。笠には、鋼が仕込んであったのだ。

「さ、試してくるんじゃ。いまのお前なら、勝てる」

ぼん、と一つ肩を押されて、少年は部屋の中程へ歩いていった。そこにはすでに、ひとりの男が身支度を整えて待っている。背格好は武達と同じくらい、右手に長めの剣を持ち、ひよいひよいと振り回している。少年が近付いたのに気付くと、その剣をすつと降ろし、威圧するかのようにその目を睨んだ。

「拙者は天極門の師範、王史啓。一応、お前の名前を聞いておこう。何かあったときには、弔わねばならんからな」

しかし、少年は一行に動じていなかった。

「ぼくは衝派源流の見習い、雷遊子！」

その態度を鼻でいなしながら、男は剣を構えた。少年も笠を右手につけ、やや体を低くする。

「二人ともよいな。…では、はじめ！」

聊諧のかけ声と共に、男が飛び込んだ。剣を中ほどに構えたまま、一気に間合いを縮め、ごく僅かな腕の振りで相手の首をはねる——だが、剣は笠によって動きを封じられた。離れようと剣を手前へ引き戻

そうとするが、笠に吸いついたかのように離れられない。

「ばかな！」

ひとこと吐いたこのとき、すでに彼の敗北は決っていたと言っている。普段の、天極門師範の彼ならば、雷遊子の盾術がまだ甘いことにも気付いただろう。だが今の彼は、子供に翻弄されて頭に血が昇った、一人の男でしかなかった。

あつという間に、少年の笠は男の胸を捉えていた。平らな部分を胸におしつけた瞬間、その柱のときき足が、大地に打ちすえられる。

ダンッ！

大地の力を集めた、まさに『山』の一撃である。それをまともに受けた男は、なすすべもなく、その場に崩れ落ちた。

聊諧がその体を無造作に引きずり、事の次第を茫然と眺めていた史栄に投げてよこす。その重みに我に

帰った男は、顔をこわばらせながら門を出て行った。去り行く男たちを見ながら、首を振る朧が口を開いた。

「ここも、見つかってしまったようじゃな。こうなつては、落ちついて修業もできまい。雷君、最後にいくつか口伝をやるう。よく聞いて、覚えておくとうい。そして、明日にはここを發つのは。よいな」

「はい、朧先生」

雷遊子が言った。手の中の笠は、彼にとつてもう重くはなかつた。

八

翌朝、まだ日が昇りきらない頃、すでに少年は、旅支度を整えていた。奥から朧が、いつも通り、足音一つさせずに近寄ってくる。

「行くかな」

「はい。朧先生、いろいろありがとつございました」

ぺこり、と頭を下げる少年に、老人はうなずきかけた。

「出る前に、いいものをやるう。ま、饑別という奴だの」

言いおわると奥へ入る。再び出てくると、手には大刀を携えていた。刀を持った手は、だらりと垂れ下がっている。突然、刀の刃がぴょこんと跳ね上がった。腕を動かさず、手首だけで刀を操っているのだ。

「これがなにか、わかるかな？」

少年はまじまじと見て、おそろおそろ答えた。

「大刀……だよな」

「違うの。これはただの刃物じゃ」

雷遊子はさらにじつと見る。幾度見たところであらう。

「わからないや。どう違うの？」

「刃物とは、ただ尖つた金物にすぎぬ。振り回されて、悪くすれば確かに命も落すがな、しかしそれだけじゃ。」

…大刀とは、こういうものを言う——」

雷遊子はわけもわからず、目の前にかざされた刀をじっと見る。何度見ても同じ刃である。

と、いきなり背筋に冷たいものが流れた。いったい何が起こったのか、問おうと顔を上げて老人を見る。いや、見られない。彼の目は、目の前の刀からどうしても離せないでいた。頭では離そうとしているのに、目だけが吸い付いたかのように動くことができない。目の前で、刀が見る間に変貌していった。ただの研いだ鉄から、凍り付くような光を放つ『何か』へと。

その光が薄れ、ついにもとの鉄に戻っても、彼の目はまだその場から離れなかった。

恐かった。いつまたあの光を浴びるかと思つと、耐えられないほどに恐かった。その恐怖の表情を見て、明諧は幾度か頷いた。

「見えたようじゃな。これが大刀、これが人を斬る

武器というものじゃ。お前さんは二度とこれを見てはならん。次に見たときは、死ぬときだと心得るんじゃな」

その言葉に救われたかのように、雷遊子はその場にへたりこんだ。

九

「失敗か…」

まだ若く張りのある、しかしとてつもなく重い声が、あたりを支配する。

黒い影があった。人形のごとき固い影の中で、その手の部分だけが別の生き物のように微妙に動いている。その影の前に、男が数人立っていた。ぼんやりとした灯籠とうろうのあかりが映し出したのは、一月ひとつきほど前、宿屋で武達と雷遊子にこっぴどくやられた男たちだった。

「すいやせん、旦那。今度あ、しくじりやしません

から、も一度、お願エしやすよ。ちいところこんとこ入り用で……」

何が入り用なのかは、誰にもわからなかった。手の影が不意に大きく動くと同時に、その場にいた三人の男たちは血煙と消えてしまったのである。断末魔を上げる暇すらない、まさに一瞬の出来事であった。

同時に、灯籠のあかりも消え、あたりは闇と化した。

「雷遊子か。まさか、妙連の弟子が来ようとはな……やはり雷天人、光莫には聡いということか……」

「いかが致しましょう」

いつものまにやら、黒衣を着た男が一人、血煙の中に立っている。手にした灯火が歩むにつれてゆらゆらと揺れ、あかりに照らされた黒衣が、闇の中で不気味に光っている。

「うん。できるなら、妙連に気付かれずに済ませたところだが——」

「妙連には、もとの仲間たちが襲いかかっております。そう簡単には戻れませぬ」

黒衣の男はそう言うと、低く笑った。影が揺れる。「侮るなよ。すでに匣連が正気を取り戻している。万が一、六連呪が全員揃おうものなら、お前の術とて役には立たないぞ」

黒衣の手が下がった。下から照らされたその顔は、いささか不満げに見える。

「ならばなぜ、妙連を生かしておくのですか？」

影の声が低くなった。

「奴が要る。だが、今はまだませぬ。もう少し出来上がってからでなければ、会わせても意味がない。」

——私のようになるのが落ちだ」

黒衣の頭が垂れる。

「少々、出過ぎました。」無礼を

「構わない。考える頭のない奴は好かないからな。さて、わかったら次の仕事を頼むぞ。」

雷遊子とあの娘を見張れ。そして、その居場所を例の連中に流せ。あの印を欲しがっている奴らにだ。ただし、お前自身は手を出さなよ、いいな」

「は…」

言葉が消えるより早く、その気配は消えていた。後にはただ灯火^{ともしび}だけが、さきほどと変わらずにゆらゆらと揺れている。影しか見えなかつた男が、ふとそのそばに寄り、手を延ばす。

灯^{あか}りに照らされたその腕は、先ほどの声の主とは思えぬほどに老いていた…

十

鋼入りの笠を頭によいしよと乗せて、明諧の家を出た少年の背中に声がかかってきた。

「さあ、行こー！」

彩花だった。あまりにも明るすぎるその声に、彼はなにか違和感を覚える。まだ先ほどの恐怖が抜け切っていないのだ。それでも違和感の元をなんとか辿^{たど}って、ついに見つけた。だした。

「行こつ、て…どこに？」

「どこでもいいのよ。きみ、旅してるんでしょ？あたしもついて行くわ」

「だって、きみは…」

「『きみ』なんて呼ばないでよ。『彩花』って名前があるんだから。前に言わなかつたつけ？」

「自分だって『きみ』って呼んでたくせに…」

ぼそぼそと言う少年の言葉に、彩花が振り返る。

「なんか言った？」

彼女の言葉に、なぜか雷遊子は逆らい難^だいものを感じていた。

「『彩花』が堅苦しいっていうなら、『彩ちゃん』でもいいわよ。きみのことも『雷ちゃん』って呼んであげるから」

雷はちよつとむつとした表情になる。

「呼び方なんてどうでもいいけど、なんでぼくについて来るの？言っとくけど、ぼくはお仕事で旅してるんだからね！」

「お仕事って言ったって、その変な袋を届けるだけなんでしょ。あたしも家がわからなくなっちゃって行くところないし、旅もしたかったし、ちよつどいいわ。」

『旅は道連れ』よお。二人の方が心強いでしょ。」

言いながら少年の背中をどんとどんと叩く。その叩き方は妙に柔らかく、それで雷遊子はふと思い出した。彼女が以前、変な男たちに襲われていたことを。

「そっか…そうだね。二人の方が、心強いよね。」

まっすぐに少女の瞳を覗きこんで、少年がにっこりと笑う。少女の頬は、見る間に朱あけに染まっていた。

「な、何よ。言っとくけどね、あたしが、このあたしがついていってあげるって言ってるのよ！」

聞いているの!? あたしがよ。きみが一人じゃあんまりかわいそうだから——」

真っ赤になって言い訳を続ける彩花を横目で見ながら、雷遊子はいつまでも、くすくす笑いながら歩いていく。

むかしのはなしである。

注

五 刀…日本で言う大雑刀（なぎなた）

六 禁軍…皇帝の直屬軍隊

あとがき

この本は、すべて T_EX によって組版されています。念願だった full T_EX 本がやっと実現しました。

なにをそんなに喜んでいるのか、不思議に思われるでしょう。しかし、私にとって full T_EX 化はとても大きな意味を持ちます。なんとと言っても、「ワープロソフトの性能不足に泣かなくてよい」というのは非常に大きい。

T_EX は確かに一般のワープロより難しい部分があります。しかし、その気になれば、そして技量が追い付けば、「文字を扱う限りどんなことでも」できるのです。

一例をあげましょう。この本は、市販されている書物¹の装丁を、ほぼまるごと真似^{まね}ています。章節のまわり、ページ番号にヘッダ、脚注²など細かいところを何度も修正して、自分なりに読みやすく組んだつもりです。

これをワープロでやってみたら、どうなるでしょう？ そもそもこれほど細かく³指定できるかどうか疑問ですが、仮にできたとしても、(数ページものならともかく)これほどの量になっては、頭がおかしくなること請け合いです⁴。特に個人でやっている場合には。

これで相当に効率は上がるはず...なのですが、さて、どうでしょうか...?

¹ 「老残遊記」平凡社 東洋文庫

² あとがきと本文とで脚注の方法を変えています。雰囲気が悪くなければ、成功なのですが...

³ それなりの技量があれば、約 $\frac{1}{2600}$ mm 単位で制御可能!!...ですけど (-_-;)

⁴ 編集の最後になって、一節分入れ損ねたのに気がいたらどうなるか、考えてみて下さい。DTPソフトだったら顔面蒼白なのですが、T_EX なら一行加えるだけで済むこともあります。

「続き物なのに、前のはなしがないと不親切だ」という姉の言葉に、総集編なるものを考えたのはもう二年前のこと。その時にやっておけば、ここまで分厚くはならなかったのですが…後悔先に立たずというのは世の常です。

もっとも、やりたくてもできない事情もありました。ここまでコピー誌で来たのですから、最後まで押し通したいという意地もあります。コピー誌で百ページ以上…死にます。ふつう、死にます。

季節は移り、パソコンが速くなり、 $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ に出会い、レーザープリンタを購入し…ようやく今、意地を捨てずに総集編が出せるようになりました。少しでもお楽しみいただけましたら、これ以上の幸せはありません。

…えらい大見栄をきってしまったが(^_^;)ここでひとつお詫びを。総集編と言いながら、内容が変わっています。特に古いものについては、原文が残っていないと言うありさま⁵なので、書き直しとっていいほど加筆しました。

ということで、ここに収めた作品群（それほどたいした物ではないけれど…）は、バージョン2です⁶。一回だけだから、堪忍してください_(_)_

⁵ 「山裾の関村にて」は半分くらい、「緑宝寺の盤印」に至っては三割ほどしか残っていません(^_^;)

⁶ バージョン1と比べないように! 読み返すと、ついつい修正しなくなって…

この本に関するお問い合わせは、奥付の住所、または電子メールにてお願い致します。

e-mail nyankoh@eastmail.com

ハンドルは、“猫好. K”もしくは“金井亭 猫好”です。

また、細々とながら情報ページを作っております。

酒処金井亭 うえぶ店

<http://sake.st/nyankoh/>

お目に止まりましたら、よろしく願いいたします。

追記：私の書く文は、基本的にコピーフリーです。コピーしたいなんていう奇特な方は、以下の三つの条件を守っていただければ、いくらでもして頂いて構いません。

1. 表紙を含む、すべての頁をコピーすること。
2. 表表紙から裏表紙までを一セットとし、各頁を分離したり、新たな頁を加えたりしないこと。
3. コピーに際して必要な、最小限の費用を越える金銭授受を伴わないこと。

...しかし、百ページのコピーなんて、考えないほうが身のためだと思いますよ。ホント。

奥付

発行 黄泉路茶屋内 金井亭
発行日 平成六年八月六日(第一版)